西南学院大学　国際文化論集　第26巻　第１号　155－228頁　2011年９月

シーボルトの生涯とその業績関係年表１
（1796-1832年）

石　山　禎　一
宮　崎　克　則

凡　　例

【１】＊印は主としてシーボルトに関わる人々が出した書簡類などを示す。
○印はシーボルトに関わる事項，または彼が記述した内容および直接相手方に宛てた手紙などを示す。
△印はシーボルトの門人関係などを示す。
◇印は当時の内外の政治・外交・文化などの事項を示す。
なお，人名などの不明箇所には〔？〕を付している。

【２】年表中に見られる書簡類は，主としてフォン・ブランデンシュタイン家（シーボルトの末裔，ドイツのヘッセン州シュルヒテルン市郊外在住）所蔵文書をもとに石山の責任で系統的に整理し，年代順に並べ替えて記載した。これら書簡類には，シーボルトの幅広い人的交流・活動範囲などが十分窺い知ることができるので，すべて掲載することにした。なお，所蔵文書中で年月日が不明なもの，あるいは未記入のもの，また宛先不明の書簡類などは，本年表には記載できないため除いた。

【参考文献】

関係年表は，主に以下の文献を参照して作成した。

(1) 呉秀三『シーボルト先生其生涯及功業』吐鳳堂書店　1925 年。
(2) 日独文化協会編『シーボルト関係書翰集』郁文堂書店　1941 年。
(3) 『上野図書館紀要』第 2 冊　国立国会図書館支部　上野図書館　1955 年。
(4) 『図説　国民の歴史』1・2　日本近代史研究会　1965 年。
(5) L.B.Holthuis・酒井恒『シーボルトと日本動物誌』学術書出版会　1970 年。
(6) 『参考書誌研究』11 号　国立国会図書館参考書誌部　1975 年。

(7) 『シーボルト「フロラヤポニカ」』（解説）講談社　1976 年。
(8) 『江崎悌三著作集』第 1 巻　思索社　1984 年。
(9) 『F. ベアト幕末日本写真集』横浜開港資料館　1987 年。
(10) 横田洋一編『横浜浮世絵』有隣堂　1989 年。
(11) 『鳴滝紀要』1～20 号　シーボルト記念館　1991～2010 年。
(12) 金井圓『近世日本とオランダ』財団法人放送大学教育振興会　1993 年。
(13) 『シーボルト「日本」』本文・図録　全 9 巻　雄松堂書店　1997 年。
(14) 箭内健次・宮崎道生編『シーボルトと日本の開国・近代化』続群書類従完成会 1997 年。
(15) フォン・ブランデンシュタイン家所蔵『シーボルト関係文書マイクロフィルム目録』1・2 巻　2001 年　長崎市教育委員会・シーボルト記念館。
(16) 『新・シーボルト研究』Ⅰ・Ⅱ　八坂書房　2003 年。
(17) 開国 150 周年記念資料集『江戸の外国公使館』港区郷土資料館　2005 年。
(18) 『異国人の見た幕末明治 JAPAN』新人物往来社　2005 年。
(19) 石山禎一・牧幸一訳『シーボルト日記』八坂書房　2006 年。
(20) 宮崎克則「復元：シーボルト『NIPPON』の配本」（『九州大学総合研究博物館研究報告』3 号　2005 年），同「シーボルト『NIPPON』の色つき図版」（『九州大学総合研究博物館研究報告』5 号　2007 年），同「シーボルト『NIPPON』のフランス語版」（『九州大学総合研究博物館研究報告』6 号　2008 年），同「シーボルト『NIPPON』のロシア語版」（『九州大学総合研究博物館研究報告』8 号　2010 年））。
(21) 栗原福也編訳『シーボルトの日本報告』東洋文庫 784　平凡社　2009 年。
(22) Dr. Hans Körner : Die Würzburger Siebold. Eine Gelehrtenfamilie des 18. und 19 Jahrhunder-ts. Leipzig Johann Ambrosius Barth Verlag. 1967. S., 356-557. (Lebensdarstellungen deutscher Naturforscher, hrsg. von der Deutschen Akademie der Naturforscher Leopoldina durch Rudolph Zaunick. Nr.13).：竹内精一訳『シーボルト父子伝』創造社 1974 年)。
(23) ACTA SIEBOLDIANA III. Die Sieboldiana-Sammlund der Ruhr-Universität Bochum, Beschri-eben von Vera Schmidt., 1989. OTTO HARRASSOWITZ・WIESBADEN.
(24) Philipp Franz von Siebold. : Schreib-Kalender für das Schaltjahr 1852.
(25) Philipp Franz von Siebold. : Geschäfts-und Termin-Kalender für das Schltjahr 1856.
(26) Philipp Franz von Siebold. : Nederlandsche en Japansche Almanak voor het Jaar 1861.
(27) Liefer-und Abrechnungsbuch über Nippon und andere grosse Veröffentlichungen Siebolds für die Jahre 1833-1838.
(28) Liefer-und Abrechnungsbuch über Nippon und andere grosse Veröffentlichungen Siebolds für die Jahre 1832-1840.
(29) Liefer-und Abrechnungbuch über Bücher und Immobilien für die Jahre 1836-1843, mit

einem Voewort.
(30) Liefer-und Abrechnungbuch für die Jahre 1839-1847.
(31) Philipp Franz von Siebold. : Tägliches Erinnerungs-Buch für alle Stände. 1848-1850.
(32) Verzeichnis der Subskribenten und Lieferungen zu Nippon, mit einer Zusammenstellung und Pro Memoria durch Alexander von Siebold.
(33) Philipp Franz von Siebold. : Buecherversendungen nach Russland 1853.
(34) Aufstellungen etc. letr Subskription auf Werk. Philipp Franz von Siebold's Nippon, Fauna, Flora u.s.w. 1834-1848.
(35) PHILIPP FRANZ VON SIEBOLD, A Contribution to the Study the Historical Relation betwe-en Japan and the Netherlands. The Netherlands Association for Japanese Studies, c/o Center for Japanese Studies, Leiden University 1978. (Philipp Franz von Siebold and the Opening of Ja-pan, 1843-1866)(注：マックリーン論文は，横山伊徳『幕末維新論集７　幕末維新と外交』吉川弘文館　2001 年)。
＊(22)～(33)の原本は，ドイツのボフム大学図書館に所蔵されている。

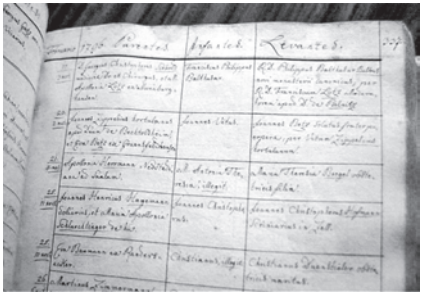
１．青少年時代（ヨーロッパ）

1796年（寛政８）　１歳

○ ２月17日（１・９）フィリップ・バルタザール・フォン・シーボルト（Philipp Baltasar von Siebold）は，ヴュルツブルグ大学医学部産科婦人科教授ヨハン・ゲオルグ・クリストフ・シーボルト（Johann Georg Christoph Siebold）とその妻アポロニア（Apollonia 旧姓ロッツ Lotz）の次男として，ヴュルツブルグ（Würzburg）に生まれる。翌日，聖キリアン大聖堂（Dom St. Kilian）で洗礼受ける。

〔図１〕シーボルトが生まれたドイツの中南部：ヴュルツブルグ市の西方にあるマリエンベルグ城から望む

〔図２〕現在の聖キリアン大聖堂（Dom St. Kilian）



〔図３〕シーボルトの生誕を示す洗礼録
（ヴュルツブルグ司教区文書館所蔵）

〔図４〕現在の聖キリアン大聖堂内にある洗礼盤

◇ 最初の蘭日辞書『波留麻和解（はるまわげ）』（江戸ハルマ）稲村三伯ら訳刊行。

1798年（寛政10）　２歳

○ １月17日（12・１）父クリストフが31歳で急逝（死因は慢性肺疾患，結核という説もある）。

◇ 近藤重蔵がエトロフ島に大日本恵土呂府の標柱を建立。

◇ 長崎出島オランダ商館長ヘンミー（Gijsbert Hemmij）が第２回江戸参府の帰路に掛川宿で死亡。

◇ 大槻玄沢『重訂解体新書』成る（1826年刊）。

◇ 米傭船イライザ号が長崎港内で座礁。

1799年（寛政11）　３歳

◇ オランダ東インド会社解散。貿易はバタヴィア政庁直営となる。

◇ 高田屋嘉兵衛がエトロフ航路を開く。

1804年（文化１）　８歳

◇ ナポレオン（Napoléon Bonaparte）皇帝即位（～15年）。

◇ ロシア使節レザノフ（Nikolaj Petrovich Rezanov）長崎へ来航。

◇ 高橋至時死去，子景保が天文方となる。

1805年（文化２）　９歳

○ 父の死去により，母方の伯父フランツ・ヨーゼフ・ロッツ（Franz Joseph Lotz）の住むハイディングスフェルト（Heidingsfeld）に移り，伯父のもとで養育される。

◇ 目付遠山景晋（かげくに）がレザノフに通商拒否を通告し，帰帆を命ずる。

1806年（文化３）　10歳

◇ バタヴィア共和国（Bataafse Republiek）廃止。

◇ ブレーメン傭船フィスルギス（Visurgis）号が長崎に来航。

1808年（文化５）　12歳

○ 伯父ロッツはハイディングスフェルトの司祭に任命される。この年から伯父の個人授業（数理・地理）を受け，ヴュルツブルグの聖ペーター教会（St. Peter）内のラテン語学校に通う。

◇ 間宮林蔵らカラフト探検（～09年）。

◇ イギリス軍艦フェートン（Pheaton）号長崎に侵入。

◇ 天文方高橋景保が長崎通詞馬場貞由・本木正栄らを招き，世界地図作成に着手する。

◇ 司馬江漢『刻白爾（こっべる）天文図解』刊。

1810年（文化７）　14歳

○ 11月３日（10・７）ヴュルツブルグの旧大学構内にある古典ギムナジウム（高等学校）に入学する。

◇ オランダ共和国フランスに併合。長崎出島孤立。

◇ 高橋景保『新訂万国全図』刊。

1814年（文化11）　18歳

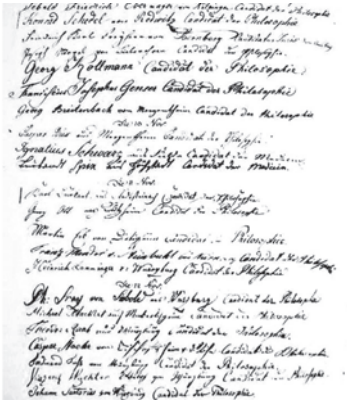
◇ ウイーン会議（～15年）。

◇ 本木正栄『諳厄利亜（あんぐりあ）語林集成』成る。

1815年（文化12）　19歳

○ 11月12日（10・12）ヴュルツブルグ大学哲学科に入学，翌年医学部に入籍する。

在学中に医学のほか自然諸科学・地理学・民族学を修め，探検旅行にも関心をもつ。



〔**図５**〕「当時のヴュルツブルグ大学医学部付属病院」とシーボルトの「ヴュルツブルグ大学入学時の学籍簿」（ヴュルツブルグ大学図書館所蔵）

◇ ネーデルランド王国成立。

◇ 杉田玄白『蘭学事始』成る。

1816年（文化13）　20歳

○ コルプス・メナーニア学生団（Corps Moenania　1814年創立）に入団する。

○ シーボルト家がバイエルンの貴族階級に登録される。

◇ オランダ再びジャワを領有。

1817年（文化14）　21歳

○ ヴュルツブルグ大学解剖学生理学教授イグナーツ・デリンガー（Prof. Dr. Ignaz Döllinger）宅に下宿し，解剖学・生理学・植物学の分野で研究を進める。この時期に学問的に重要な様々なコンタクトを広げる。

◇ オランダ定期船復活。ヤン・コック・ブロムホフ（Jan Cock Blomhoff）が長崎出島オランダ商館長に着任（在任期間：1817年12月６日～1823年11月20日）し，オランダの独立を伝える。

1818年（文政１）　22歳

＊ 5月5日（4・1）Chr. ミュルレル（Chr. Müller）がゲッチンゲン（Göttingen）からシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 7月16日（6・14）ヴュルツブルグから叔父エリアス・フォン・シーボルト（Elias von Siebold）宛の手紙を書く。

＊ 7月21日（6・19）叔父エリアス・フォン・シーボルトがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 同日　ダルムシュタット市医療監察官で大叔父のダミアン・フォン・シーボルト（Damian von Siebold シーボルトの祖父カール・カスパル・フォン・シーボルト Carl Caspar von Siebold の次男）がダルムシュタット（Darmstadt）からシーボルト宛に書簡を送る。

○ 月日不詳，ヴュルツブルグ大学解剖学生理学教授イグナーツ・デリンガー博士の指導を受け，牛の陰嚢の乾燥標本を作製する。

◇ ジャワ，オランダに返還。

1819年（文政２）　23歳

＊ 5月23日（4・30）叔父エリアス・フォン・シーボルトがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

1820年（文政３）　24歳

○ 2月3日（12・19）バイエルン王国下フランケン地区政府がフィリップ・フランツ・フォン・シーボルトの除隊証明書を交付。

＊ 2月10日（12・26）ダルムシュタット市医療監察官で大叔父のダミアン・フォン・シーボルトがダルムシュタットからシーボルト宛に書簡を送る。

◇ 8月，オランダ船フォルティテュド（Fortitudo）号，船長リーヴェス（N. Lieves）とニューツェルスト（Nieuwe Zeelust）号，船長ピーター・ツヴァルト（Pieter Zwart）の両船が長崎に入港。

○ 9月5日（7・28）医師資格試験に「優秀」の成績で合格。ヴュルツブルグ大学を卒業。

○ 9月17日（8・20）ヘレーネ・フォン・ガーゲルン（Helene von Gagern のちシー

ボルトの妻）がノイマルク（Neumark）のレードルフ（Rehdorf）で生まれる。

○ 10月９日（９・３）ヴュルツブルグ大学医学部講堂で学位授与の公開討論会後，内科学・外科学・産科学博士の学位を受ける。

＊ 12月20日（11・15）ヴュルツブルグ大学解剖学生理学教授イグナーツ・デリンガー博士がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ ハイディングスフェルトで開業医となる。

1821年（文政４）　25歳

＊ ４月26日（３・24）サムセン博士（Dr. L. F. S. Samsen）がライデンからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ５月21日（４・20）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

◇ ８月　オランダ船ジャワ Java 号（船長ショット A. Schott）とフォルティテュド号（船長 N.リーヴェス）の両船が長崎に入港。

○ ９月19日（８・23）ハイディングスフェルト町役場から地域医療の功績証明書（賞状）受ける。

○ 12月27日（12・４）ハイディングスフェルトにて，フランクフルト・アム・マイン（Frankfurt am Main）のゼンケンベルグ（Senkenberg）自然科学研究所教授フィリップ・ヤコブ・クレッチマー博士（Prof. Dr. Philipp Jakob Cretzmar）宛の手紙を書く（注：『参考書誌研究』第11号　10-11頁）。

◇ 伊能忠敬の「大日本沿海輿地全図」が高橋景保の監督で完成し，「大日本沿海実測録」を添えて幕府に献上される。

1822年（文政５）　26歳

＊ １月30日（１・８）叔父ヨアヒム・ロッツ（Joachim Lotz 母アポロニアおよびフランツ・ヨーゼフ・ロッツの弟）がキッシンゲン（Kitssingen）からシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』11号　54-55頁）。

＊ ２月６日（１・15）ヘッケル書店（Hakelsche　Buchhandlung）がヴュルツブルグからシーボルト宛に勘定書を送る。

○ ３月１日（閏１・８）フランクフルト・アム・マインのゼンケンベルク自然科学研究学所の通信会員に任命され，フランクフルトに新設の博物館にあらゆる種類

の博物標本を送るよう委託される。

○ 3月4日（閏1・11）ハイディングスフェルトにて，フランクフルト・アム・マインのゼンケンベルグ自然科学研究所教授ヤコブ・クレッチマー博士宛の手紙を書く（注：『参考書誌研究』第11号　11頁）。

○ 3月7日（閏1・14）ヴュルツブルグから1820年9月5日に実施された卒業試験合格証明書（ヴュルツブルグ大学法医学教授トーマス・ルーランド博士 Prof. Dr. Thomas Ruland 署名）を受領。

＊ 3月10日（閏1・17）ダルムシュタット市医療監察官の大叔父ダミアン・フォン・シーボルトがベルリン（Berlin）からシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 3月18日（閏1・25）ゼンケンベルグ自然科学研究所教授ヤコブ・クレッチマー博士がフランクフルトからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』11号　55頁）。

＊ 3月22日（閏1・29）叔父エリアス・フォン・シーボルトがベルリンからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』11号　55-56頁）。

＊ 4月29日（3・8）バイエルン王国宮廷枢密顧問官フォン・モル男爵（Freiheer von Moll）がミュンヘンからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』11号　56-58頁）。

＊ 4月30日（3・9）ヴュルツブルグ大学医学部教授アンドレアス・メッツ博士（Prof. Dr. Andreas Metz）がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』11号　59頁）。

＊ 5月4日（3・13）バンベルガー博士（Dr. Bamberger）がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 5月13日（3・22）ヴュルツブルグのバイエルン王国警察から旅券を受け取る。

○ バイエルン国王マキシミリアン一世ヨーゼフ・フォン・バイエルン（Joseph Maximilian I.）から国籍保持のままオランダ勤務の許可を得る。

○ 6月6日（4・17）ヴュルツブルグから卒業証明書（ヴュルツブルグ大学外科学教授フォン・カイエテン・テキストール博士　Prof. Dr. Cajetan von Textor 署名）を受領。

○ 6月7日（4・18）ヴュルツブルグ近郊ハイディングスフェルトを出発。ダルムシュタットの親戚（大叔父ダミアン・フォン・シーボルト宅）を訪ね，フランク

フルト，ハーナウ（Hanau），ボン（Bonn）を回る。

＊ 6月8日（4・19）ハインリッヒ・シュテップ（Heinrich Stepf）がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』11号　59-60頁）。

○ 6月15日（4・26）フランクフルトにて，母アポロニア宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』11号　60-61頁）。

○ 6月26日（5・8）王立レオポルド・カロリン自然研究者アカデミー会員（Mitglied der Kaiserlich Leopoldnisch-Carolinische Akademie der Naturforscher 別名カッセーリウス Casserius）免状を総裁ネース・フォン・エーゼンベック博士（Dr. Nees von Esenbeck）から授与。同日，ハーナウのヴェタラウ（Wetterau）全博物学会正会員に任命され，フランクフルトに新設の博物館にあらゆる種類の博物標本を送るよう委任を受ける。

＊ 6月30日（5・12）ヴュルツブルグ大学解剖学生理学教授イグナーツ・デリンガーがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』11号　62頁）。

○ 7月6日（5・18）アンダーナッハ（Andernach）にて，伯父ロッツ宛および母アポロニア宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』11号　62-64頁）。

○ 7月8日（5・20）ボンに到着。同地にて，伯父ロッツおよび母アポロニア宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』11号　64-66頁）。

○ 7月15日（5・27）フランクフルトにて，母アポロニア宛の手紙を書く。

○ 7月19日（6・2）デン・ハーグ（Den Haag）に着く。オランダ王国軍医総監フランツ・ヨーゼフ・ハールバウアー博士（Dr. Joseph Franz Harbauer）のもとを訪ねる。ハールバウアー不在のため，一等書記官デュッケル博士（Dr. Dückel）に面会，オランダ領東インド植民地陸軍一等外科医少佐に任命され，年俸3,600フローリン（fl.）を支給される旨告げられる。

○ 7月20日（6・3）ハーグにて，伯父ロッツ宛および母アポロニア宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』12号　73-75頁）。

○ 7月22日（6・5）ハーグにて，ヴュルツブルグ大学解剖学生理学教授イグナーツ・デリンガー宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』12号　76-78頁）。

＊ 同日，学友ハリッツ？（Haritz　ハルツ Hartz）がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 7月29日（6・12）ヴュルツブルグ大学解剖学生理学教授イグナーツ・デリンガー

がヴュルツブルグからシーボルトの書簡に対する返書を送る（注：『鳴滝紀要』12号　78-79頁）。

○ ８月１日（６・15）ユトレヒト（Utrecht）近郊のハルダーウェイク（Harderwyk）第一師団に出頭。

＊ 同日，オランダ軍医総監フランツ・ヨーゼフ・ハルバウアー博士（Dr. Franz Joseph Harbaur）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』12号　80頁）。

＊ ８月２日（６・16）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ８月７日（６・21）大叔父ダミアン・フォン・シーボルトがダルムシュタットからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』12号　80-81頁）。

＊ ８月11日（６・25）大叔父ダミアン・フォン・シーボルトの養女テレーゼ・カッペンベルガー（Therese Kappenberger）がハイディングスフェルトからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』12号　81-82頁）。

＊ ８月14日（６・28）シーボルトの親友・医師リンゲルマン博士（Dr. Ringelmann）がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』12号　82-84頁）。

○ ８月17日（７・１）ハルダーウェイク（Harderwyk）にて，伯父ロッツ宛および母アポロニア宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』12号　84-87頁）。

○ ８月22日（７・６）ハルダーウェイクにて，叔父エリアス・フォン・シーボルト宛の手紙を書く（注：ハンス・ケルナー著／竹内精一訳『シーボルト父子伝』12頁，および『鳴滝紀要』12号　87-89頁）。

＊ 同日，母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ ８月30日（７・14）ハルダーウェイクにて，伯父ロッツ宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』12号　89-90頁）。

○ ９月９日（７・24）ハーグにて，母アポロニア宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』12号　91-92頁）。

○ ９月10日（７・25）ハーグにて，母アポロニア宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』12号　92頁）。

＊ ９月13日（７・28）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ９月15日（８・１）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』12号　93-94頁）。

＊ 9月17日（8・3）母アポロニア宛と叔父ヨアヒム・ロッツがキッチンゲンからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』12号　95-97頁）。

○ 9月21日（8・8）ロッテルダムにて，伯父ロッツ宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』12号　97-98頁）。

○ 9月23日（8・9）ロッテルダムで300トンのフリーゲート船デ・ヨンゲ・アドリアーナ（De Jonge Adriana）号，船長ジャコメッティ（Theodor Azon Jacometti）に乗船。同日，ジャワに向かう。

＊ 11月23日（10・10）バイエーレン？（A. J. Baierlen）がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 月日不詳，オーベルトゥール博士（Dr. Oberthur）がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

◇ 宇田川榕菴『菩多尼訶経』成る。

◇ 宇田川玄真『遠西医方名物考』刊行始まる。

2．第1回来日時の活動

1823年（文政6）　27歳

○ 2月13日（1・3）デ・ヨンゲ・アドリアーナ号がバタヴィア（Batavia）に到着。

○ 2月27日（1・17）デ・ヨンゲ・アドリアーナ号船上で，母アポロニア宛と伯父ロッツ宛の手紙を書く。

○ オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン（van der Capellen）の命によりバタヴィア近郊ヴェルテフレーデン（Weltevreden ジャカルタ市内）の第五砲兵連隊付軍医に配属。東インド自然科学調査官兼任。

○ 3月9日（1・23）バタヴィアにて，フランス科学アカデミー所属のアラゴー（Arago）宛の手紙を書く。

○ 3月15日（2・3）ヴェルテフレーデンにて，伯父ロッツ宛の手紙を書く（注：『シーボルト父子伝』14頁）。

○ 3月18日（2・6）ヴェルテフレーデンにて，ヴュルツブルグ大学医学部外科研究所所長ハイネ教授（Prof. Heine）宛の手紙（母アポロニア宛と伯父ロッツ宛の手紙を添付）を書く（注：『鳴滝紀要』13号　104-107頁）。

○ 3月中旬　リュウマチ性熱病に冒され1ヵ月間隊付勤務できず。このため，バイテンゾルフにあるオランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンの別荘に赴き治療。3週間滞在し総督に日本研究の希望を述べる。

○ 4月15日（3・5）ヴェルテフレーデンにて，母アポロニアと伯父ロッツ宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』13号　107-111頁）。

○ 4月18日（3・8）日本在勤を命じられ，長崎出島のオランダ商館付外科医に任ぜらる。（注：栗原福也編訳『シーボルトの日本報告』19-21頁）。

＊ 4月19日（3・9）オランダ領東インド政庁通商部がバタヴィアからシーボルト宛に公式文書を送る。

＊ 4月22日（3・12）オランダ領東インド陸軍司令部がヴェルデフレーデンからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 5月1日（3・21）ヴェルテフレーデンにて，ボン大学植物学教授・王立レオポルディーナ自然科学アカデミー総裁ネース・フォン・エーゼンベック博士宛の手紙を書く（注：『シーボルト父子伝』17-18頁）。

○ 5月20日（4・10）バイテンゾルフからバタヴィアにもどる。

＊ 同日，オランダ領東インド総督・評議会決議により，日本へ赴任する外科医シーボルトに対して現在受け取っている俸給ならびに会食費に加えて，さらに月額100グルデンの報奨金を付加する（注：『シーボルトの日本報告』21-22頁）。

○ 5月29日（4・19）ヴェルテフレーデンにて，母アポロニアと伯父ロッツ宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』13号　111-114頁）。

＊ 6月15日（5・7）バーゼル博士（Dr. Basel）がパレムベルグ？（Palenberg）からシーボルト宛書簡を送る。

○ 6月21日（5・12）バタヴィアにて，母アポロニア宛と伯父ロッツ宛の手紙と添付の目録を書く（注：『鳴滝紀要』13号　114-123頁）。

＊ 6月24日（5・15）オランダ領東インド総督府のブルンナー？（Brunner）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 6月25日（5・16）オランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンク（ten Brink）商会がバタヴィアから「ヨハンナ・エリサベス（Johanna Elizabeth）号積載の荷物リスト」と「薬品見積書」をシーボルト宛に送る。

○ 6月27日（5・19）夜，出島オランダ商館長として着任のヨハン・ウィルヘルム・

デ・ステュルレル（Johan Wilhelm de Sturler）大佐と共にデ・ドリー・ヘズュステル（de Drie Gezuster 三人姉妹）号，船長 T. A.ジャコメッティに乗船する。

○ 6月28日（5・20）バタヴィアを出航する。僚船オンデルネーミング（Onderneeming）号，船長レルツ（H.M. Lelsz）と共に日本に向かう。

＊ 7月3日（5・25）バンカ海峡の途上，デ・ドリー・ヘズュステル号から母アポロニア宛と伯父ロッツ宛に書簡を送る（注：『シーボルト父子伝』18-19頁，『鳴滝紀要』14号　37-40頁）。

＊ 7月10日（6・3）叔父ヨアヒム・ロッツがキッシンゲンからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』14号　40-41頁）。

○ 7月13日（6・6）草稿『調査報告1．シナ海における船長 T. A.ジャコメッティー率いるデ・ヘズュステル号船上にて。オランダからの航海素描』（独文）の執筆。

＊ 7月17日（6・10）シーボルトの親友・医師リンゲルマン博士（Dr. Ringelmann）がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』14号　41-42頁）。

＊ 7月22日（6・15）学友ハリッツ？（Haritz　ハルツ Hartz）がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』14号　43頁）。

＊ 7月25日（6・18）母アポロニアと伯父ロッツらがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』14号　44-45頁）。

＊ 7月26日（6・19）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』14号　45-49頁）。

○ 8月5日（6・29）両船とも正午に北緯31度20分・東経128度24分に達するが，激しい台風に遭遇する。

○ 8月6日（7・1）なお嵐が荒れ狂う。

○ 8月7日（7・2）男女群島を見る。西南西から西へ2分の1の方角16海里と観測する。

○ 8月8日（7・3）船は野母崎の東南東に位置している。船上から日本の沿岸風景を楽しむ。

○ 8月9日（7・4）伊王島北端を廻る。数人の日本の役人と通詞が来船する。

○ 8月10日（7・5）数人の通詞と御番所衆が来船。流暢なオランダ語を話す通詞に驚く。オランダ人でないことが露見しそうになるが，辛うじて免れる。長崎口

港に入る。

○ ８月11日（７・６）港内に曳航する。

○ ８月12日（７・７）出島水門から上陸。外科部屋に居住。

〔図６〕デ・ドリー・ヘズュステル（三人姉妹）号

〔図７〕長崎湾（シーボルト『NIPPON』図版）

○ ８月23日（７・18）バタヴィアから持ち渡った牛痘ワクチンを接種するが，失敗に終わる。

＊ ９月９日（８・５）ミュンヘン大学教授イグナーツ・デリンガーがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』14号　49-51頁）。

○ ９月日付不詳，其扇（そのぎ，楠本たき17歳）を入れる。

○ 10月９日（９・６）論文『日本博物誌』（ラテン文）を脱稿する。ヨーロッパ人の業績と現状について述べ，哺乳類５種・鳥類２種・爬虫類１種・魚類１種・甲殻類14種・昆虫２種の計25種を記載する。翌年，バタヴィアで刊行した。

＊ 10月30日（９・23）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』15号　62-63頁）。

○ 11月12日（10・10）出島にて，王立レオポルディーナ自然科学アカデミー総裁ネース・フォン・エーゼンベック教授宛の手紙を書く（注：『シーボルト父子伝』24-25頁）。

○ 11月15日（10・13）出島にて，母アポロニア宛と伯父ロッツ宛の手紙を書き，其扇（その ぎ）と結ばれたことを報告する（注：『シーボルト父子伝』28頁，『鳴滝紀要』15号68-69頁）。

◇同日，出島オランダ商館長ブロムホフがオランダ領東インド総督ならびに財務局長宛に，「シーボルトらがもたらした牛痘苗および博物学の調査資料に関する一般報告書」を送る（注：『シーボルトの日本報告』26-28頁）。

○11月16日（10・14）出島にて，母アポロニア宛と伯父ロッツ宛の手紙を書く。

○11月18日（10・16）出島にて，叔父エリアス・フォン・シーボルト宛の手紙を書く。

◇11月20日（10・18）商館長ブロムホフの帰任に伴い，出島オランダ商館長職を後任のデ・ステュルレルが引き継ぐ（在任：1823年11月20日～1826年７月２日）。

○11月23日（10・21）出島にて，叔父エリアス・フォン・シーボルト宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』15号　69-70頁）。

○11月日付不詳，出島にて，オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』15号　71-72頁）。

○11月日付不詳，出島にて，オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン宛へ，「日本における自然調査について活動に関する現状について報告書」を書く（注：『シーボルトの日本報告』28-37頁）。

◇11月日付不詳，商館長ブロムホフがバタヴィア芸術科学協会長宛に，シーボルトの晴雨計および温度計の観測の正確さについて書簡を送る（注：『シーボルトの日本報告』26頁）。

＊12月２日（11・２）江戸の蘭学者宇田川榕菴がシーボルト宛に書簡を送る。

＊12月11日（11・10）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊12月17日（11・16）教師マグダ・リープラー（Magda Liebler）がハイディングスフェルトからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』第15号　72-73頁）。

＊12月21日（11・20）付，江戸の蘭学者宇田川榕菴より書簡を受け取る。

＊12月25日（11・24）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』15号　63-64頁）。

＊12月30日（11・29）ミュンヘン大学教授イグナーツ・デリンガーがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』第15号　73頁）。

＊12月31日（11・30）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』15号　64頁）。

○月日不詳　長崎郊外の稲佐山へ登り植物調査をする。

○月日不詳　この年ジャワへ「日本の植物：押し葉標本」を送る。

○ 前出島オランダ商館長ヤン・コック・ブロムホフ（Jan Cock Blomhoff）の世話で美馬順三・湊長安・平井海蔵・高良斎・二宮敬作・石井宗謙・伊東玄朴ら門人となる。絵師川原慶賀に動植物・風景・人物像を描かせる。
○ バタヴィア所在，芸術科学協会会員。
◇ アメリカがモンロー主義を宣言する。

1824年（文政７）　28歳

＊ １月８日（12・８）ミュンヘン大学教授イグナーツ・デリンガーがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 同日，母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ １月14日（12・14）ロッテルダムの船主・貿易商ファン・ホボーケン（Antony van Hoboken）がロッテルダム（Rotterdam）からシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ２月13日（１・14）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ２月14日（１・15）ロスト？（Rost）がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
△ ２月　岡研介門人となる。
◇ ２月17日（１・18）バタヴィアのオランダ領東インド総督決議録に，シーボルトの博物学調査に関する記述が記載される（注：『シーボルトの日本報告』41-42頁）。
○ ３月４日（２・４）草稿『長崎通詞会所発長崎奉行宛』を執筆。
◇ 同日　出島オランダ商館長宛に，シーボルトの博物学調査に関して「オランダ領東インド財務局長訓令」が送られる（注：『シーボルトの日本報告』42-45頁）。
○ ３月　長崎奉行の許可を得て，通詞の楢林塾・吉雄塾を借りて診療と医学教育が行われる。
＊ ４月９日（３・10）王立レオポルディーナ自然科学アカデミー総裁ネース・フォン・エーゼンベック博士がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
○ ５月　植物収集のため門人美馬順三ら肥後（金峰山など）・筑前方面に派遣。
○ ６月頃　日本人の名義を借りて長崎郊外の鳴滝に民家と土地を購入し，学塾と植物園（薬草園）設ける。塾では週１回，診療と医学，自然科学などを教え，日本研究の拠点とし以後４年間存続する。
＊ ６月２日（５・６）オランダ領東インド総督府のブゥケン（L. Boeken）がバタヴィ

アからシーボルト宛に書簡を送る。

◇ 6月5日（5・9）バイテンゾルフ植物園長ブルーメがオランダ領東インド総督宛に，シーボルトによる日本植物送付に関する書簡を送る（注：『シーボルトの日本報告』45-47頁）。

＊ 6月8日（5・12）バイテンゾルフ植物園長ブルーメ（C.L. Blume）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルトの日本報告』47-48頁）。

◇ 6月10日（5・14）バタヴィアのオランダ領東インド総督府秘書長ブスケットが総督不在のため副総督による決議録で，シーボルトによる日本植物，種子をバタヴアに送付することなどを記載する（注：『シーボルトの日本報告』48-49頁）。

＊ 6月14日（5・18）オランダ領東インド総督府のレンゼン（G. Rensen）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

◇ 6月15日（5・19）バイテンゾルフの植物園園長ブルーメがバタヴィアから出島オランダ商館長宛に，シーボルトに要請した植物および種子の発送についての書簡を送る（注：『シーボルトの日本報告』49頁）。

＊ 6月23日（5・27）バイテンゾルフの植物園園長ブルーメがバタヴィア近郊のタンガング？（Tangang）からシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 6月25日（5・29）オランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンク商会がバタヴィアからシーボルト宛に清算書を送る。

＊ 6月27日（6・1）オランダ領東インド総督府のH. J.ボン（H. J. Bonn）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡送る。

＊ 6月，前出島オランダ商館長ヤン・コック・ブロムホフがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 7月8日（6・12）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 同日，バイテンゾルフ植物園園長ブルーメがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルトの日本報告』50頁）。

＊ 7月17日（6・21）シーボルトの親友・医師リンゲルマン博士（Dr. Ringelmann）がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

◇ 7月26日（7・2）オランダ船アリヌス・マリヌス（Arinus Marinus）号，船長ヤコブ・クラスゾーン・シプケス（Jacob Klaaszoon Sipkes）とイダ・アレイダ（Ida Alejda）号，船長ヤコブ・ハーン（Jacob Hahn）長崎に入港。

○ ８月４日（７・10）出島にて，母アポロニア宛と伯父ロッツ宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』16号　51-52頁）。
＊ ８月20日（７・26）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ８月24日（８・１）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ８月26日（８・３）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
○ ９月　門人高良斎を動植物の収集のため下関・大坂・京に派遣。
＊ 10月８日（閏８・16）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 10月10日（旧８・18）門人美馬順三が長崎からシーボルトの母アポロニア宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』24-25頁）。
○ 宇田川榕菴より歌麿の『画本虫撰』を贈られる。
○ 10月　前年脱稿の『日本博物誌』（ラテン文）をバタヴィアで出版。
＊ 10月26日（９・５）長崎の中国人（唐通詞）チン・ウェン・プゥ（Tsin wen Poe）がシーボルト宛に，眼病治癒の礼状を送る。
○ 10月30日（９・９）出島にて，オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン宛に手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』83頁）。
◇ 11月７日（９・17）オランダ商館長デ・ステュルレルが出島からシーボルトは医学・博物学に造詣が深という書簡を長崎奉行高橋越前守宛に送る（注：『シーボルトの日本報告』53-54頁）。
○ 11月12日（９・22）出島にて，オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン宛に手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』84-88頁）。
＊ 11月13日（９・23）母アポロニアがバンベルグ（Bamberg）からシーボルト宛に書簡を送る。
○ 11月15日（９・25）出島にて，ライデン（Leiden）の王立自然史博物館館長コンラート・ヤコブ・テミンク（Conraad Jacob Temminck）宛の手紙を書く（注：『シーボルトと日本動物誌』248-250頁）。
○ 11月20日（９・30）出島にて，オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン宛に手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』89-91頁）。
○ 11月23日（10・４）出島にて，商館長デ・ステュルレル宛に長文の手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』197-200頁）。
○ 11月26日（10・６）出島にて，オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン

宛の手紙と報告書を書く（注：『鳴滝紀要』16号　54-57頁，『シーボルトの日本報告』57-83頁）。

△ 11月　戸塚静海門人となる。

○ 11月　出島にて，オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンに日本での活動状況を報告，画家・事務職員・医師をひとりずつ派遣するよう要請する。

○ 12月　出島にて，バイテンゾルフ植物園園長ブルーメ宛に手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』91-101頁）。

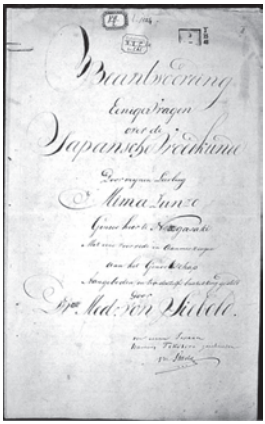
◇ 12月１日（10・11）オランダ商館長デ・ステュルレルが出島からオランダ領東インド総督ならびに財務局長宛に，シーボルト提案の庭園にある家屋，その他の一般報告書を送る（注：『シーボルトの日本報告』55-57頁）。

○ 12月３日（10・13）出島にて，母アポロニア宛と伯父ロッツ宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』16号　57-59頁）。

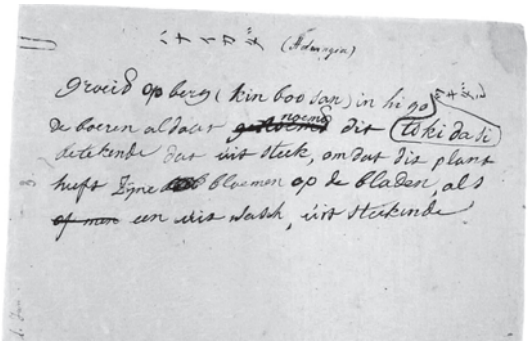
○ 日付不詳，草稿『日本人の起源に関する論文』（蘭文）を執筆する。

○ 日付不詳，草稿『日本産科学に関する若干の問題について長崎の私の門人医師美馬順三による回答』（蘭文）を執筆する。

○ 日付不詳，草稿『通詞仲間への書簡』を執筆する（注：『シーボルトの日本報告』50-53頁）。



〔図８〕美馬順三の「日本産科学の蘭語論文」（ドイツ，ボフム大学図書館所蔵　1.161）



〔図９〕美馬順三が「肥後の金峰山で1824年５月に採集のハナイカダ」の記述（蘭語文）（ボフム大学図書館所蔵　1.203）

○ 日付不詳，草稿『日本語概略』（自ら日本で彫った木版：表10枚付）を執筆する。
◇ イギリス捕鯨船員薩摩宝島に上陸。
◇ 水戸藩がイギリス捕鯨船と交易の漁民300人を逮捕。
◇ 第１次ビルマ戦争起こる（～1826年）

1825年（文政８）　29歳

＊ １月１日（11・13）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ２月28日（１・11）付，江戸の蘭学者宇田川榕菴がシーボルトの手紙を受け取る。
◇ ３月22日（２・３）オランダ領東インド総督府秘書長ブスケットがバタヴィアから出島オランダ商館長宛に，シーボルトに関する「オランダ領東インド総督決議録抜粋」を送る（注：『シーボルトの日本報告』105頁）。
◇ ４月19日（３・２）オランダ領東インド総督府秘書長ブスケットがバタヴィアから出島オランダ商館長宛に，シーボルトに関する「オランダ領東インド財務局決議録抜粋　第20号」を送る（注：『シーボルトの日本報告』105-110頁）。
○ 同日　オランダ領東インド総督府より，出島に植物園の許可と予算措置の通達があり，正式の植物園となる。以後，日本を退去するまで1,400種以上の植物が栽培される。
＊ ４月28日（３・11）オランダ領東インド総督府秘書長ブスケットがバイテンゾルフからシーボルト宛に，博物学調査支出などに関する「オランダ領東インド総督決議録抜粋」を送る（注：『シーボルトの日本報告』110-112頁）。
○ ４月　江戸の蘭学者宇田川榕菴がシーボルトへ20種の押し葉を送付する。
＊ ５月11日（３・24）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
◇ ５月19日（４・２）バタヴィアから「オランダ領東インド総督・同東インド評議会決議録抜粋」（シーボルトの1824年11月26日付書簡に関して）が出島商館長デ・ステュルレル宛に送付される。
＊ ５月26日（４・９）園芸家ルイーゼ・ストリィボッシュ（Louise Strybosch）がボッシュ（Bosch）からシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ６月15日（４・29）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
◇ ６月21日（５・６）バイテンゾルフにて，バイテンゾルフ植物園園長C.L.ブルーメが『日本植物リスト』を作成。

＊ 6月23日（5・8）オランダ領東インド総督府のレンゼンがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 6月24日（5・9）オランダ領東インド総督府のハインツ？（Hainz）がバイテンゾルフから，また同政庁のカンダールシャー？（Canderluscher）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 6月25日（5・10）オランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンク商会がバタヴィアからシーボルト宛の書簡と精算書，併せて「(船長）ジャコメッティおよびバスコ・ダ・ガマ（Basco da Gamma）号により日本に搬送された商品のリスト」と「シーボルトの注文で自己負担による取り寄せ商品リスト」,「日本在住のフィリップ・フランツ・フォン・シーボルト氏用請求書」などを送る。また同政庁のマウリッツェ（S. Mauritse）とレンシング（D. Lenzing）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 6月26日（5・11）オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがバイテンゾルフからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』16号　59-61頁）。

＊ 6月27日（5・12）オランダ領東インド総督府のS.マウリッツェがバタヴィアから，また同総督府のヒルシュ（Hirsch）がヴェルテフレーデン（現ジャカルタ内）からシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 6月29日（5・14）オランダ領東インド総督府のD.レンシングがバタヴィアからシーボルト宛に書簡送る。

＊ 7月1日（5・16）オランダ領東インド総督府秘書長ブスケットがバタヴィアからシーボルト宛に，収集された博物学の対象物と生存動物を日本から送ることなどについての「オランダ領東インド総督決議録抜粋」を送る（注：『シーボルトの日本報告』112-113頁）。

○ 7月14日（5・29）出島にて，商館長デ・ステュルレル宛に手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』200頁）。

＊ 同日　商館長デ・ステュルレルが出島からシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルトの日本報告』200-201頁）。

＊ 7月16日（6・1）商館長デ・ステュルレルが出島からシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルトの日本報告』201-202頁）。

＊ 7月19日（6・4）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

△ ７月26日（６・11）門人美馬順三没する（享年30歳）。

○ ８月６日（６・22）オランダ船バスコ・ダ・ガマ号，船長ベゼマー（A. Bezemer）とヨハンナ・エリザベス号，船長 M. メスダーハ（M. Mesdagh）の両船が長崎に入港。同日，日本研究の助手としてハインリッヒ・ビュルゲル（H. Burger）とドゥ・ヴィルヌーヴ（C.H. de Villeneuve）が出島に着任。また前年，オランダ領東インド総督に要請のロンドン製ノニウス附六分儀，ロンドンのハットン・ハリック社製クロノメーター635号，精巧な水銀の付いた水準器，ファーレンハイト製温度計などとヨーロッパおよびバタヴィアに注文した書籍43冊（実は42冊）も出島に来着する。

○ ８月30日（７・17）出島にて，母アポロニアと伯父ロッツ宛の手紙（ただし末尾は12月16日）（注：『鳴滝紀要』16号　61-63頁）。

＊ 同日，ヴュルツブルグ大学医学部教授アンドレアス・メッツ博士カ（Prof. Dr. Andreas Metz）宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』17号　100-102頁）。

△ ８月　高野長英門人となる。

＊ ９月３日（７・21）シーブラー G. Siebler がハイディングスフェルドからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ９月23日（８・11）前出島オランダ商館長ヤン・コック・ブロムホフがシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ９月30日（８・18）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 10月３日（８・21）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。リンゲルマン博士がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 10月18日（９・７）出島にて，論文「日本の植物学に関する状態について」執筆。

○ 10月21日（９・10）出島にて，商館長デ・ステュルレル宛に手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』142-144頁）。

○ 10月25日（９・14）出島にて，商館長デ・ステュルレル宛に手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』145頁）。

＊ 同日　商館長デ・ステュルレルが10月21日付のシーボルトの手紙に対する返書をシーボルト宛に送る（注：『シーボルトの日本報告』145-147頁）。

○ 10月28日（９・17）出島にて，商館長デ・ステュルレル宛に手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』147-150頁）。

○ 10月日付不詳，出島で天文観測する。また，草稿／図表『1825年出島から天文観測』（蘭文）出島にて執筆。

◇ 11月２日（９・22）商館長デ・ステュルレルが出島からオランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン宛に，自らの健康上の理由で商館長交替の請願書を送る（注：『シーボルトの日本報告』113-114頁）。

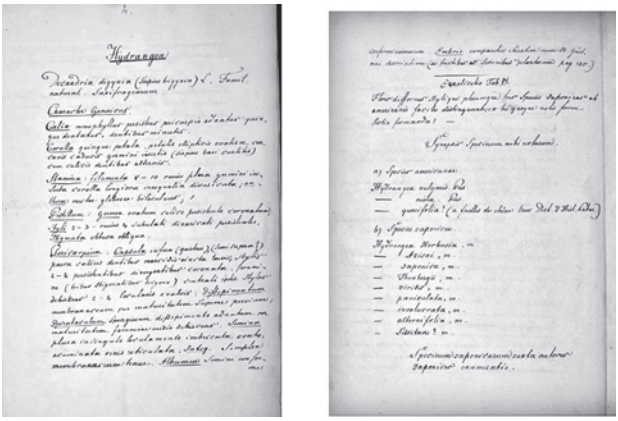
＊ 11月21日（10・12）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 11月23日（10・14）出島にて，商館長デ・ステュルレル宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』17号　102-104頁）。

＊ 11月25日（10・16）ロッテルダムの船主・貿易商 A. ファン・ホボーケンがロッテルダムからシーボルト宛に請求書と納品書を送る。

＊ 11月30日（10・21）ロッテルダムの船主・貿易商 A.ファン・ホボーケンがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 11月，出島にて，論文「日本産アジサイ属各種の短評」について執筆。



〔**図10**〕シーボルト自筆論文「日本産アジサイ属各種の短評」
（ボフム大学図書館所蔵　1.162）

○ 12月１日（10・22）出島にて，バイテンゾルフ植物園園長ブルーメ宛に，６月21日付のブルーメの書簡に対する返書を書く（注：『シーボルトの日本報告』166-168頁）。

○ 12月２日（10・23）出島にて，オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン

宛に，日本研究に関する種々の報告書など書簡（注：『シーボルトの日本報告』114-142頁，『鳴滝紀要』20号　36-36頁）を書く。種々の報告書とは「1825年度自然調査のため年々与えられる調査費使途明細報告」・「日本における自然調査に要する若干の品物リスト」・「家屋と植物園設置の費用」・「1823年注文，本年当地で受領したヨーロッパならびにバタヴィアからの書物若干」・「日本滞在中に着手した若干の学術的調査リスト」・「1825年に発送した希少な自然物のリスト」など（注：『シーボルトの日本報告』150-166頁）。

○ 同日　アントン・ファン・ホボーケン宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』第20号36-37頁）。

○ 12月５日（10・26）付で，門人湊長安に託して江戸の蘭学者たちへの手紙を書く。

○ 同日　ファン・デル・カペレン宛の手紙も書く（注：『鳴滝紀要』第20号　29-34頁）。

○ 12月16日（11・７）テン・ブリンク・レインスト商会宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』第20号　34-36頁）。

◇ 12月18日（11・９）草稿『ヨハンナ・エリザベス号船載の荷物について』出島オランダ商館員H.ビュルゲルが出島で執筆。

○ 同日　出島にて，ネース・フォン・エーゼンベック博士宛の手紙を書く（「日本の植物学に関する状態について」報告。1829年ボンの帝立レオポルド・カール・アカデミーの『自然の不思議に関する物理医学新紀要』第14巻　第２部に掲載）（注：「日本の植物学に関する状態について」の原稿は，ドイツのボフム大学図書館の「シーボルト関係資料」の中にある）。

○ 12月26日（11・17）出島にて，母アポロニア宛と伯父ロッツ宛の手紙を書く（注：『鳴滝紀要』17号　104-105頁）。

＊ 12月30日（11・21）ミュンヘン大学教授イグナーツ・デリンガーがミュンヘンからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 月日不詳，日本茶の種子をジャワに無事送り，同島の茶栽培が始まる。

○ 草稿『オランダ海軍大尉A.ベゼマー船長率いるバスコ・ダ・ガマ号のバタヴィア発日本行き航海，1825年７月２日から1825年８月６日航海日誌抜粋』（蘭文）執筆者不詳を入手。

○ 月日不詳，『日本産科学に関する若干の問題について長崎の私の門人美馬順三によ

る回答』を「バタヴィア芸術科学協会雑誌」（第10巻）に掲載。
○ シーボルト口述・高良斎訳『薬品応手録』を大坂にて私費で出版。
△ 日高涼台門人となる。
◇ 異国船（無二念）打払令。オランダ船には日本通商の幡を交付。
◇ 青地林宗『気海観瀾』訳成る（27年刊）。
◇ ジャワで対オランダ反乱起こる（ジャワ戦争）。
◇ イギリス船が陸奥九戸沖に来航。

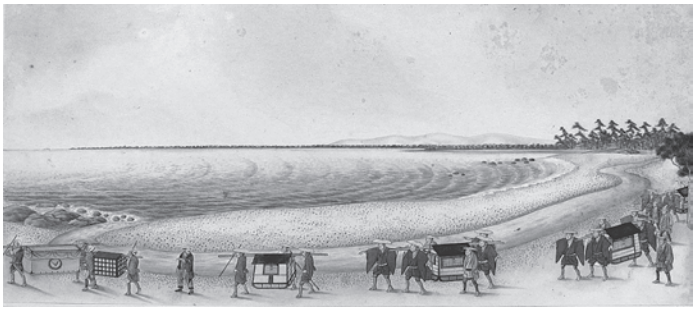
1826年（文政９）　30歳

○ １月１日（11・23）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
○ １月25日（12・18）出島にて，商館長デ・ステュルレル宛に手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』177-176頁）。
＊ １月26日（12・19）商館長デ・ステュルレルが出島から昨日のシーボルトの手紙に対する返書を送る（注：『シーボルトの日本報告』178-179頁）。
○ 同日　出島にて，商館長デ・ステュルレル宛に手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』179-180頁）。
＊ １月27日（12・20）出島オランダ商館荷倉役 J. F.ファン・オーフェルメール・フィッシャーがシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 同日　商館長デ・ステュルレルがシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルトの日本報告』180-181頁）。
○ １月29日（12・22）出島にて，商館長デ・ステュルレル宛に手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』181-183頁）。
＊ １月30日（12・23）商館長デ・ステュルレルが出島からシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルトの日本報告』184頁）。
○ １月31日（12・24）出島にて，オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン宛に，博物学調査に関する長文の手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』168-176頁）。
○ ２月13日（１・７）出島にて，「調査費使途明細書の報告」を書く（注：『シーボルトの日本報告』219-220頁）。
○ ２月14日（１・８）草稿『江戸参府旅行におけるシーボルトに与えられた命令』

（蘭文）を執筆。

＊ 同日，ヴュルツブルグの同級生だったオランダ領東インド総督侍医コルマン博士（Dr. Georg. Joseph. Kollmann）がバイテンゾルフからシーボルト宛に書簡を送る。

○ ２月15日（１・９）商館長デ・ステュルレルに従い長崎を出発し，江戸に向かう。H. ビュルゲル・高良斎・二宮敬作・石井宗謙・湊長安・川原慶賀も同行する。出島－諫早。威福寺での別れの宴・日本の気候・長崎郊外の植物群・九州の温泉・一向宗の寺院。



〔**図11**〕オランダ使節団の行列（川原慶賀筆，オランダ，ライデン国立民族学博物館所蔵）

○ ２月16日（１・10）諫早－大村－彼杵。緯度の測定・大村の真珠・大フキ・天然痘の隔離。

○ ２月17日（１・11）彼杵－嬉野－塚崎（武雄）。二ノ瀬のクスノキ・嬉野と塚崎の温泉視察・温泉水の分析など。

○ ２月18日（１・12）塚崎－小田－佐賀。神崎小田の馬頭観音と梵字・佐賀についての記述。

○ ２月19日（１・13）神崎－山家。筑後川流域の農業・二度の収穫・ハゼノキと蝋燭・肥前の陶器・轟木で太陽高度測定・カワウソの発見・山家の鉱物コレクション・福岡藩主別荘での宿泊。

○ ２月20日（１・14）山家－木屋瀬。四季の植物群・キジ・ヤマドリ・クチレン病患者・内陸部高地の住民の顔立ち。

○ ２月21日（１・15）木屋瀬－小倉。石炭についての観察・ガン・カモ・ツルなど渡り鳥の捕獲・小倉藩の使者来訪〔阿蘭陀定宿は大坂屋善五郎の館〕。

○ ２月22日（１・16）小倉－下関。小倉の市場・海峡の深度などコンパスや深度測定の錘により観測・海峡渡航・与次兵衛瀬の記念碑・二人の市長。〔下関の阿蘭陀定宿は佐甲甚右衛門と伊藤杢之允の館の内，シーボルト一行は佐甲家宿泊〕。

＊ 同日，出島オランダ商館員 C.H.ドゥ・ヴィルヌーヴが出島からシーボルト宛に書簡を送る。

○ ２月23日（１・17）下関滞在。数人の門人来訪・カニの眼・ヘイケガニを入手・ホウキタケの記述。

○ ２月24日（１・18）下関滞在。クロノメーターで経度観測・太陽高度測定・早鞆岬と阿弥陀寺（現在の赤間神宮）・安徳天皇廟・伊藤杢之允の招待など。

○ ２月25日（１・19）下関滞在。クロノメーターで経度観測・太陽高度測定・日本人の知識・萩の富豪熊谷五右衛門義比・植物採集と海峡のコンパス測量・鉱物のコレクション調査。

○ ２月26日（１・20）下関滞在。クロノメーターで経度観測・門人知人の来訪・門人が論文を提出・病人の診療と手術。

○ ２月27日（１・21）下関滞在。近郊の散策・コンパスを使って測量・六連島・捕鯨についての記述。

○ ２月28日（１・22）下関滞在。参府用の船の設備検査・府中侯医官の訪問・『薬品応手録』進呈。

○ ３月１日（１・23）下関。門人知人と別れの挨拶と贈物受納と贈呈・中津侯に対するブロムホフの詩・太陽高度測定・正午過ぎ乗船・下関の市街と神社仏閣の記述。

○ ３月２日（１・24）下関出帆・正午ごろ太陽高度測定。

○ ３月３日（１・25）船中・船は停泊したまま，風がしだいに強くなる。

＊ 同日，出島オランダ商館員 C.H.ドゥ・ヴィルヌーヴが出島からシーボルト宛に書簡を送る。

○ ３月４日（１・26）船上からクロノメーターで観測・コンパスを使って測量・経度と方位の測定のために屋代島の東南牛首崎に上陸・象の臼歯の化石発見・植物観察・三原の沖に停泊。

○ ３月５日（１・27）船中・水島灘に入る・田島および弓削島間でクロノメーターによる経緯度の観測・太陽高度測定・阿伏兎観音琴平山を望む・内海の景観・日比に停泊。

○ ３月６日（１・28）船中・早朝上陸・コンパスで測量・地質調査と植物観察・日比の塩田と製塩法。

○ ３月７日（１・29）日比－室津。日比の湾でクロノメーターによる経度観測・室の宿舎および建築様式・家具など。

○ ３月８日（１・30）室滞在。クロノメーターで経緯度観測・太陽高度測定・診断・室の港とその付近・娼家・室明神・室の産業。

○ ３月９日（２・１）室－姫路。日本の農民・肥料・シラサギ・ヒバリ・姫路の市街・播磨の国・植物の整理。

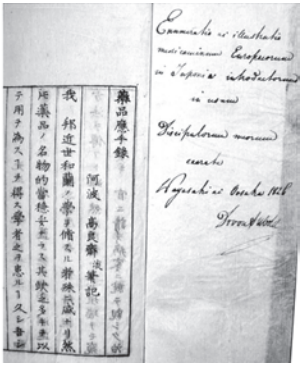
○ ３月10日（２・２）姫路－加古川。降雪の中を出発・曾根の松・石の宝殿・高砂の力士の招待。

○ ３月11日（２・３）加古川－兵庫。加古川地方の農業・明石でのコンパスを使っての測量・兵庫の藩侯の侍医数人が患者を連れて来訪。

○ ３月12日（２・４）兵庫－西宮。楠木正成の墓・生田明神の社・フジノキ・住吉での太陽高度測定・夜，門人（大坂城代の侍医）来訪。

○ ３月13日（２・５）西宮－大坂。尼崎の町・松平遠江守の城下・神崎川を渡船・大坂郊外の様子。

○ ３月14日（２・６）大坂滞在。多数の医師来訪。シーボルト口述・高良斎訳『薬品応手録』の刷りあがり本を受け取る。１匹のカメを入手。



〔図12〕高良斎の肖像（高於菟三・壮吉著『高良斎』より）
と高良斎訳『薬品応手録』シーボルト署名入り
（オランダ，ハーグ国立公文書館所蔵）

○ 3月15日（2・7）大坂滞在。クロノメーターで経度観測，いくつかの手術を行なう。
○ 3月16日（2・8）大坂滞在。鹿の奇形・飛脚便についての記述。
○ 3月17日（2・9）大坂－伏見。淀川の灌漑・枚方の娼婦。
○ 3月18日（2・10）伏見－京都。東福寺と方広寺の傍らを通り，宿舎〔阿蘭陀定宿は海老屋村上専八の館〕につき太陽高度測定・小森肥後介（玄良）・新宮涼庭・美馬順三の兄ら訪問・湊長安が大坂からもどる。
○ 3月19日（2・11）京都滞在。クロノメーターで経緯度観測・小森肥後介・小倉中納言来訪。
○ 3月20日（2・12）京都滞在。気象観測用の器具の手入れ・数人の医師が患者を連れて来訪。
○ 3月21日（2・13）京都滞在。クロノメーターで経度観測・来客・高良斎の持ち銭の盗難など。
○ 3月22日（2・14）京都滞在。クロノメーターで経緯度観測・6時間ごとに気象観測・来客多数・地理学および地誌学の本を購入し蔵書の整理・二条城についての記述。
○ 3月23日（2・15）京都滞在。クロノメーターで経度観測・京都の天文台・京都について・来客とくに患者多し・珍しい植物オウレン。
○ 3月24日（2・16）京都滞在。クロノメーターで経緯度観測・明日の出発準備。
○ 3月25日（2・17）京都－草津。京都の町並と住民・琵琶湖付近の風景（原文では，この日の日付けを欠く）。
○ 3月26日（2・18）草津－土山。梅木の売薬・薬屋の主人〔大角弥右衛門〕からヨモギを原料にして作られるモグサを手に入れ，植物採集を依頼・三宝荒神・トキ2羽を含む剥製の鳥を買う。
○ 3月27日（2・19）土山（現在の滋賀県甲賀郡水口町・土山町）を発ち，蟹ヶ坂の山地を通り鈴鹿峠で休み，山岳地帯の街道を坂ノ下（現在の三重県鈴鹿郡関町坂ノ下）に向う。2．3日先行の湊長安より植物，化石，鈴鹿山で入手された生きたオオサンショウウオを受け取る。亀山から四日市へ。
○ 3月28日（2・20）四日市－ヤズ（弥富か）。正午クロノメーターで経緯度観測・里程を示す塚・2度の収穫・桑名の鋳物。

○ ３月29日（２・21）弥富－宮－池鯉鮒。二度の収穫の意味・H.ビュルゲルと共に参府一行より数マイル先行・太陽高度測定・水谷助六・大河内存真・伊藤圭介が宮より同行・水谷助六からハシリドコロの図を含む植物写生図をもらい，属名が正確に記されていることに驚く・駕籠の中で調査研究・黒曜石を手に入れる。

○ ３月30日（２・22）池鯉鮒－矢矧橋－吉田。矢矧川とその橋の記述・ハクチョウとキツネの剥製を買う。タヌキ・アナグマ・カワウソなどの毛皮を見る・尾洲侯の参府の行列・娼家。

○ ３月31日（２・23）吉田－浜松。雲母の採集・シラウオ・ヒトデのほか，いくつかのカニ類を採集。

○ ４月１日（２・24）浜松－掛川。秋葉山大権現・商館長ヘンミーの墓。

○ ４月２日（２・25）掛川－大井川－藤枝。佐夜の中山・クロノメーターで経度観測・太陽高度測定・大井川の渡河・川人足。

○ ４月３日（２・26）藤枝－府中。サメ，ガンギエイなどの軟骨魚類の皮加工・タヌキの一変種とモグラを入手・安倍川の渡河・府中の木細工と編細工・沖津（興津）に中国ジャンク船漂着の噂。

○ ４月４日（２・27）府中－沖津。ウズラ・アホウドリ・タカアシガニを入手・沖津川増水渡河不能・上席検吏が来訪し化学実験を見せる。

○ ４月５日（２・28）沖津－蒲原。和紙製造の観察・急造の橋。

○ ４月６日（２・29）蒲原－沼津。岩淵村でクロノメーターによる経度観測・富士山の絶景を楽しむ・富士川を舟で渡る・富士山の高度を六分儀で測量・原の庄屋植松与右衛門の庭園を観賞（カンアオイ・センノウ・ユリ・ボタン・ヒメシャクナゲなど）。

○ ４月７日（３・１）沼津－箱根－小田原。山中でフサザクラなどの植物を採集・助手のビュルゲルは地質学調査に没頭・箱根山の高度測定・太陽高度測定・関所・植物観察・中津侯側近神谷源内が出迎え。

〔図13〕渡辺崋山筆「ビュルゲル対談図」
（上野益三『博物学史論集』より）

○ 4月8日（3・2）小田原―藤沢。八幡社の祭・越後獅子・旅館満員のため娼家に宿泊する。

○ 4月9日（3・3）藤沢―川崎。生麦村の「熊茶屋」で熊を観察。江戸宿舎の主人長崎屋源右衛門と数人の医師出迎え。

○ 4月10日（3・4）川崎―江戸。数羽の黒ツル観察・礼装着用して出発・大森で薩摩・中津両侯出迎え・品川で桂川甫賢出迎え・江戸の商店・長崎奉行の代理の上席番所衆2人が宿舎に来訪〔阿蘭陀定宿は長崎屋源右衛門の館〕。

○ 4月11日（3・5）江戸滞在。上席番所衆が2人の番所衆と勘定方を伴い来訪・面会を許されず名刺を差出したもの桂川甫賢・神谷源内・大槻玄沢ら。夜に中津侯来訪。

〔図14〕「ボタニクス」（桂川甫賢）からシーボルトへ送った「トリノエ」（ライデン国立民族学博物館所蔵）

○ 4月12日（3・6）江戸滞在。終日贈物の荷解き・薩摩侯からの贈物・夜に中津侯来訪。

○ 4月13日（3・7）江戸滞在。友人医師多数来訪・桂川甫賢や宇田川榕菴から乾腊植物をもらう・幕府の侍医の階位と分類の記述。

○ 4月14日（3・8）江戸滞在。クロノメーターで経度観測・午後多数の日本人来訪・将軍とその世子ならびに幕府高官へ贈物を発送する。

○ 4月15日（3・9）江戸滞在。正午クロノメーターで経度観測・夜に中津・薩摩両侯正式に来訪・贈物の授受・薩摩侯に鳥の剥製の作り方を教える・身分の高い夫人の診察・番所衆来訪。

○ 4月16日（3・10）江戸滞在。午前クロノメーターで経度観測・最上徳内が来訪し，エゾ・カラフトの地図を借用・同地方やアイヌの記述・銅の輸出査定・夜に将軍の侍医たち数名を食事に招く。

○ 4月17日（3・11）江戸滞在。夜に桂川甫賢・大槻玄沢来訪ひとときを過す。

○ ４月18日（３・12）江戸滞在。高橋作左衛門来訪。

＊同日，出島オランダ商館員 C.H.ドゥ・ヴィルヌーヴが出島からシーボルト宛に書簡を送る。

○ ４月19日（３・13）江戸滞在。桂川甫賢来訪し，シーボルトの長期滞在の見通しを伝える・夜間に中津侯来訪。

○ ４月20日（３・14）江戸滞在。幕府医官に豚を使って眼の解剖と手術の講義・地震。

○ ４月21日（３・15）江戸滞在。この日まで毎朝最上徳内とエゾ語の研究・将軍拝謁延期・針医石坂宗哲その他の医師，知人来訪。

〔図15〕最上徳内の肖像画
（川原慶賀筆，ドイツ，ブランデンシュタイン城博物館所蔵，「1826年に江戸で描く，最上徳内72才」のシーボルト註記あり）

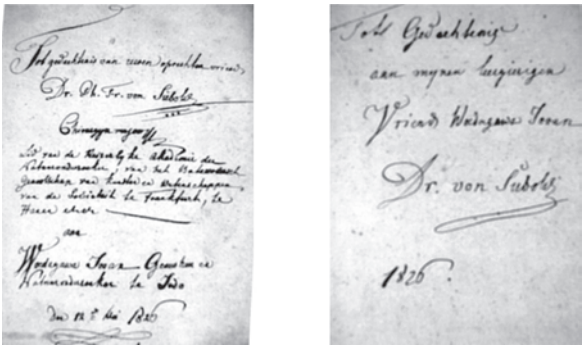
〔図16〕徳内がシーボルトに贈った樹木標本
（ライデン国立植物標本館所蔵）

○ ４月22日（３・16）江戸滞在。上席番所衆から多数の珍しい植物贈られる・上席番所衆や下級番所衆にガラスや陶器などの贈物をする。

○ ４月23日（３・17）江戸滞在。幕府の医師に天然痘と種痘について説明し，日本に導入する計画を述べる。来訪の医師大槻玄沢へ記念品として，N. Ez.ファンリール著『アブラハム・カパドゥーズの種痘論争における批判的見解』１冊（アムステルダム，A. J.ファン・テトローデ　1824年刊：Abraham Capadose., Kritische aanmerkingen op de bestrijding der vaccine van Abraham Capadose, door N. Ez. van Lier. Amsterdam, A. J. van Tetroode, 1824. 注：原本は早稲田大学図書館所蔵，シーボルト署名記入）を贈る。

○ 4月24日（3・18）江戸滞在。夜に幕府天文方や友人知人来訪しきり。
○ 4月25日（3・19）江戸滞在。クロノメーターで経度観測・将軍の侍医とくに眼科医にベラドンナで瞳孔を開く実験をみせる・栗本瑞見来訪し植物絵巻や魚類・甲殻類の画集を見せてもらう。
○ 4月26日（3・20）江戸滞在。新生児の兎唇手術・3人の子どもに種痘を行なう。
○ 4月27日（3・21）江戸滞在。2人の子どもに種痘・夜に中津侯来訪。
○ 4月28日（3・22）江戸滞在。ラッコ皮の売り込み人が来て，小判70枚要求される。
○ 4月29日（3・23）江戸滞在。天文方の人々再び来訪。
○ 4月30日（3・24）江戸滞在。幕府の侍医らシーボルトの江戸長期滞在が許されるよう，請願を提出する決議をしたい旨，番所衆に公表・医師たち終日滞留。同日，江戸にて商館長デ・ステュルレル宛に手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』217-218頁）。
○ 5月1日（3・25）江戸滞在。江戸城へ登城・謁見の予行・将軍に謁見・西の丸へ・老中や若年寄を訪礼・婦人たちの見物の的となる・日本の慣例により菓子を持ち帰る・激しい頭痛と胃の調子を悪くして，夜9時宿に帰りつく。
○ 5月2日（3・26）江戸滞在。町奉行・寺社奉行を訪問・将軍のために翻訳する植物学書を受け取る・激しい頭痛に翌日の大半を床で過す。
○ 5月3日（3・27）江戸滞在。将軍の侍医・諸侯の家臣ら来訪・庶民階級の日本人との交際。
○ 5月4日（3・28）江戸滞在。将軍と世子に拝謁し暇乞い・将軍からの命令書を受ける・江戸の市街構造・江戸城・市中・市制・貧富の差など。
○ 5月5日（3・29）江戸滞在。薩摩老侯来訪・使節の公式行列についての記述。
○ 5月6日（3・30）江戸滞在。将軍の侍医や諸侯の侍医来訪・江戸長期滞在の希望ある由通知。
○ 5月7日（4・1）江戸滞在。夜に中津侯来訪し鷹狩の道具をもらう・高橋作左衛門景保来訪しエゾ・カラフトの地図を見せてもらう・天文方の多くの人々公式来訪。
○ 5月8日（4・2）江戸滞在。幕府の侍医多数来訪・漢方医たちシーボルトの江戸長期滞在に反対している由を聞く。
○ 5月9日（4・3）江戸滞在。知人友人来訪。（「江戸参府紀行」には10日から14日までの記事欠く）

○ ５月12日（４・６）宇田川榕菴へ記念として，J.バスターの着色図入り海洋動植物解説書『自然博物学の楽しみ－詳しく写実的に描かれた400以上の植物と虫類を含む』（全２部１巻：Job Baster., Natuurkundige uitspanningen, behelzende eene beschrijving, van meer dan vier hondert planten en insekten, kerurig naar het leven afgebeeld. deel 1-2. vernieuwde hollandsche uitgave. Utrecht, O.J. van Paddenburg, O.J. van Dijk. 注：原本は早稲田大学図書館所蔵，シーボルト署名記入）を贈る。また後日，K. P. J.クルト・スプレンゲルの『植物知識入門』全３巻（ハーレ，C. A.クンメル　1817年－1818年刊：Kurt Sprengel., Anleitung zur Kentniss der Gewächse. Zweite, ganz umgearbeitete Ausgabe. Halle, C. A. Kümmel, 1817-1818 2 v. plates. Contents. : Tl. 1 Vom Bau und der Natur der Gewächse. 1817. Tl. 2. Abt, 1. Uebersicht der Gewächsreichs nach natürlichen Verwandtschaffen. 1817. Tl. 2. Ibd. 1818. 注：原本は早稲田大学図書館所蔵，シーボルト署名記入）を記念品として贈る。



〔図17〕J. バスター著『自然博物学』と K. P. J. スプレンゲル著『植物知識入門』に見られるシーボルトの署名（早稲田大学図書館所蔵）

○ ５月15日（４・９）江戸滞在。侍医たちと別れの宴・高橋作左衛門景保来訪して日本地図を示し，後日これを贈ることを約束する。

○ ５月16日（４・10）江戸滞在。将軍侍医から書面を受け取り，江戸滞在期間延期の望みなくなる。岩崎灌園この日までの間に何回か来訪し，草類44品，木類34品および石類などの鑑定を乞う。

○ ５月17日（４・11）江戸滞在。明日江戸出発と決まる。

○ 5月18日（4・12）江戸－川崎。長崎奉行からの上席検吏・正9時出発・品川で薩摩老侯が接待・大森で中津のご隠居との別れ・鈴が森の刑場・藁細工・海生動物・渡し舟で六郷川を渡り川崎につく。

○ 5月19日（4・13）川崎－藤沢。鶴見や生麦付近でナシの独特の柵作りを見る。

○ 5月20日（4・14）藤沢－小田原。大磯で伊勢藩主の行列に会う・植物の収穫わずか。

○ 5月21日（4・15）小田原－三島。途中同行して来た最上徳内と山崎の三枚橋の畔で別れる・植物観察・往路で見つけたフサザクラの葉付枝を採集・売薬のサンショウウオ・箱根山中での観測。

○ 5月22日（4・16）三島－蒲原。裕福な農民の住居と街道を通り再び原の植松氏の庭園を見る。

○ 5月23日（4・17）蒲原－府中。牛車の記述・全国的に有名な編細工や木工品を買い集める。

○ 5月24日（4・18）府中－日坂。安倍川を渡り，藤枝で昼食・付近の産地の薬用植物・アジサイ・クロモジ・ウツギなど採集・深夜まで植物整理と乾燥標本で時を過す。

○ 5月25日（4・19）日坂－浜松。高良斉兄弟来訪・掛川付近の織布・見付村近くでモウセンゴケ見つける。

○ 5月26日（4・20）浜松－赤坂。植物採集・マムシ捕える・夜中まで植物整理と乾燥標本に没頭。

○ 5月27日（4・21）赤坂－宮。朝早く激しい雨・大浜付近でスイレンを観察・宮で水谷助六・大河内存真・伊藤圭介と会う・夜中まで植物調査と鑑定。

○ 5月28日（4・22）宮－桑名－四日市。宮の渡し舟と周辺の景観・オオムギやナタネ畑。

○ 5月29日（4・23）四日市－庄野－亀山－関。種々のスイレンの観察。

＊ 同日，バイテンゾルフ（Buitenzorg）の植物園園長C. L.ブルーメがバイテンゾルフからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 5月30日（4・24）関－石部。山の娘・山岳地帯の植物群・夏目村の噴水。

○ 5月31日（4・25）石部－大津。梅木村で出島宛発送の植物目録受け取る・川辺の善性寺の庭でスイレン・ウド・カエデを見る・屋根瓦の製法を見学・夜に友人

知人医師たち来訪。

○ ６月１日（４・26）大津－京都。礼装して出発・牛車について・京の郊外で友人出迎え。

○ ６月２日（４・27）京都滞在。門人慶太郎が京都周辺の珍しい植物を出島に送ったことを聞く・友人門人・小森肥後介・新宮涼庭ら来訪・京都と宮廷の組織について記述。

○ ６月３日（４・28）京都滞在。商家の娘と小森肥後介の娘来訪し，シーボルトに京団扇を贈る・京都の支配・宮廷に関する記述など。

〔図18〕小森桃塢の肖像（小森家所蔵）とシーボルトに贈られた小森家の京団扇（ミュンヘン国立民族学博物館所蔵）

＊ 同日，オランダ領東インド総督侍医 Dr. G. J.コルマン博士およびヨゼフィーネ・コルマン（Josephine Kollmann）がバイテンゾルフからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』17号　106-110頁）。

○ ６月４日（４・29）京都滞在。小鳥の見本を持った売込み人が来て，ヤマウズラなど小判50枚要求される・小森肥後介から宮廷の衣装の話を聞く。

○ ６月５日（４・30）京都滞在。夜に小森肥後介とその家族と過す。

○ ６月６日（５・１）京都滞在。所司代・町奉行を訪問・京都の商店・牛車についての記述。

○ ６月７日（５・２）京都－伏見－大坂。智恩院・祇園社・清水寺・高台寺・大徳寺・醍醐寺・方広寺・三十三間堂などを見る・小森肥後介と伏見で会い，淀川を下る。

○ 6月8日（5・3）大坂滞在（阿蘭陀宿は長崎屋為川半十朗宅）。大坂についての詳しい記述。（ただし，この日の日付を欠く）

○ 6月9日（5・4）大坂滞在。研究用品の購入と注文。

○ 6月10日（5・5）大坂滞在。市内の神社や寺院に行く・心斎橋・天下茶屋・住吉明神の神楽・天王寺を見物・植木屋・動物商の記述。

○ 6月11日（5・6）大坂滞在。町奉行訪問・製銅所を訪れ製銅法を見学し，銅鉱石，棹銅・『鼓銅図録』などもらう。同日，江戸の蘭学者宇田川榕菴宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』7頁）。

○ 6月12日（5・7）大坂滞在。午前クロノメーターで経度観測・芝居見物・日本の劇場・妹背山の芝居の概略。

〈中央は捻挫した商館長ステュルレル。右がビュルゲル。左がシーボルト。〉

〔**図19**〕鶴岱筆「シーボルト観劇図」（国立国会図書館所蔵）

○ 6月13日（5・8）大坂滞在。知友の来訪者多数・明日出発。

○ 6月14日（5・9）大坂－西宮。正午船で尼崎に向かう・肥料船について。

○ 6月15日（5・10）西宮－兵庫。F88－90度の暑さ・肥料の臭気・珍しい形のツバメの巣を観察。

○ 6月16日（5・11）～6月18日（5・13）兵庫滞在。向かい風のため数日出港延期・港付近の町。

○ 6月19日（5・14）兵庫－船中。午前クロノメーターで経度観測・午後乗船・夕方兵庫を出港。

○ ６月20日（５・15）船中。朝，室の沖・クロノメーターで経度観測・太陽高度測定・夜半に錨をおろす。

○ ６月21日（５・６日）船中。朝には室の沖合－日比半島と讃岐の間の水道に船を進める－正午に与島に行き，ハギ・サルトリイバラなどを採集・塩飽島の造船所。

＊ 同日，オランダ領東インド総督府のフォン・アンゲルバッハ（J. H. von Angelbach）がバイテンゾルフからシーボルト宛に書簡を送る。

○ ６月22日（５・17）船中。夕方に備後の海岸に向かって進み陸地付近に停泊。

○ ６月23日（５・18）船中。引き船で鞆に入港・正午上陸・町並の様子・医王寺・付近の山の植物群観察・コフキコガネ（昆虫）採集・夜半港外へ。

＊ 同日，オランダ領東インド総督府のレンゼン（G. Rensen）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

○ ６月24日（５・19）船中。猟舟に引かれて島伝いに進み，夕方御手洗沖に夜半停泊。

○ ６月25日（５・20）船中。クロノメーターで経度観測・御手洗から数人の患者が来て診察を求む・患者の１人少女の病状の記述・夜半暴風。

＊ 同日，オランダ領東インド総督府カンター？（P. Canter）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

○ ６月26日（５・21）船中。風雨強く，午後出帆・夕方，上関瀬戸を経て夜上関に入港・バロメーター27秒・寒暖計69度・湿度55度。

＊ 同日，オランダ領東インド総督侍医 G. J.コルマン博士がバイテンゾルフからシーボルト宛書簡を送る。

○ ６月27日（５・22）上関。午前クロノメーターで経度観測・H. ビュルゲルと上陸し上関見物・阿伏兎観音をまつる寺（超専寺）・近傍の山の植物群観察・瀬戸の出口の庭園・帰船後，海峡の深度測定・室津へ・夜出港。

○ ６月28日（５・23）船中。クロノメーターで緯度観測・祝島と姫島のコンパス測量・午後２時過ぎ下関入港・送り届けておいた動植物の状態を確認。

＊ 同日　オランダ領東インド政庁のヴェッター（S. Vetter）およびバイテンゾルフ植物園園長カール・ルートヴィヒ・ブルーメ博士（Dr. Carl Ludwig Blume）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

○ ６月29日（５・24）下関滞在。海峡の記録入手・友人を訪問。

＊ 同日　オランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンク商会がバタヴィアからシーボルト宛に精算書を送る。

○ 6月30日（5・25）下関－小倉。水路に関する報告・水深測量。

＊同日　オランダ領東インド総督府のS.ヴェッターがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。また同総督府のファン・テン・ブリンク商会がバタヴィアからシーボルト宛に精算書を送る。

○ 7月1日（5・26）小倉－飯塚。田植えの様子・午後木屋瀬。

＊同日　オランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンク商会がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 7月2日（5・27）飯塚－田代。夜明けとともに出発・小倉以来不快な気分・F 90度余りの猛暑・珍しいジンチョウゲ・婦人の奇妙な眼瞼・高良斉が山地の植物採集。

○ 7月3日（5・28）田代－牛津。前夜の蚊・肥前地方の田植・佐賀藩士の警衛を受く・F 92度・灌漑用水路でヒツジグサ・オニバスなど見る。

＊同日，母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 7月4日（5・29）牛津－嬉野。水田の作業・灌漑の仕事・三坂峠付近の植物群・痘瘡で死んだ子供の葬式・夕方，茶栽培で名高い嬉野に着く。

○ 7月5日（6・1）嬉野－大村。有名なクスノキの老樹をスケッチさせる。F 90度（C 約32度）・出島の友人がみな元気との便りを受ける。

◇同日，オランダ船オンデルネーミング号，船長H. M.レルツとアレクサンダー（Alexander）号，船長M.マルクセン（M. Marcusen）の両船が長崎に入港。

○ 7月6日（6・2）大村－矢上。出迎えの人数しだいに増す・矢上で上席検吏の検査を受け荷物に封印。

○ 7月7日（6・3）矢上－出島。正午同郷人に迎えられ出島に着く。

△ 7月　岡泰安門人となる。

＊ 7月22日（6・18）ヴュルツブルグ地方裁判所所長ゲオルグ・デェルファー（Georg Doerffer，シーボルトのメナーニア会友人）がシーボルト宛に書簡を送る。

○後任ヘルマン・フェリックス・メイラン（Germain Felix Maylan）が出島商館長に着任（在任：1826年7月2日～1830年10月31日）。

○ 8月26日（7・23）長崎にて，高橋作左衛門景保宛に手紙を書く。

＊ 8月29日（7・26）母アポロニアと伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 参府旅行から帰った後，数週間，胃の病気（胃カタル）に苦しむ。

○ 商館長デ・ステュルレル帰国。シーボルト収集の最初の船荷（博物標本６箱）が送られ，翌年（1827年）５月27日にライデン博物館に到着。

○ ９月15日（8.14）早朝，出島オランダ商館員C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴやH.ビュルゲルらと共に，長崎湾に面した漁村小瀬戸に調査旅行する。草稿『長崎近郊の漁村小瀬戸へ調査旅行』（独文）を執筆。（注：宮坂正英訳「シーボルトの日誌　漁村小瀬戸への調査の旅（草稿）」『鳴滝紀要』１号，および石山禎一『シーボルト』－日本の植物に賭けた生涯－里文出版　2000年　64-84頁）。

＊ ９月26日（８・26）商館長G. F.メイランが出島からシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 10月１日（８・30）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 10月２日（11・３）鳴滝塾に出向き製薬する。

○ 10月５日（11・４）ヨーロッパよりバタヴィア経由で，1825年長崎に届いた書籍の控えを作る。その内，動植物に関する書籍が25部あり，当時の博物学の代表的著作が含まれる。

○ 10月30日（９・29）出島にて，「博物学調査のための用具と書籍」を執筆（注：『シーボルトの日本報告』218-219頁）。

○ 11月23日（12・21）長崎近郊の一本木に調査に出かけ，出島オランダ商館員H.ビュルゲルらと共に薬草を採集する。

○ 11月24日（12・22）出島にて，商館長ファン・メイラン宛に長文の書簡を書く（注：『シーボルトの日本報告』191-196頁）。

○ 12月１日（11・３）出島にて，オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン宛の手紙と報告書を書く（注：『シーボルトの日本報告』202-216頁）。

＊ 同日，ロッテルダムの船主・貿易商A.ファン・ホボーケンがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。高橋作左衛門景保がシーボルト宛に書簡を送る。

○ 12月８日（11・10）出島にて，オランダ領東インド総督府のテン・ブリンク＝レインスト商会宛の手紙を書く。（注：『鳴滝紀要』第18号　53-55頁）。

○ 12月10日（11・12）出島にて，バイテンゾルフ植物園管理事務所宛とバタヴィア農業局宛手紙を書く。

○ 12月11日（11・13）付，出島にて，草稿『バイテンゾルフ植物園管理事務所宛の下書き書簡』を書き写す。

○ 12月18日（11・20）出島にて，オランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンク＝レインスト商会宛の手紙の下書き。（注：『鳴滝紀要』第18号　55頁）。

＊ 12月19日（11・21）オランダ船（オンデルネーミング号），船長 H. M.レルツが出島からシーボルト宛に12月18日付けの手紙に言及された受け取りを送る。（注：『鳴滝紀要』第18号　55頁）。

○ 12月21日（11・23）出島にて，母アポロニア宛と伯父ロッツ宛の手紙を書く。（注：『鳴滝紀要』18号　56-61頁）。また同日，出島からオランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンク宛の手紙も書く。

＊ 12月22日（11・24）ゲント（Gent）大学およびライデン大学教授トゥールベッケ（Prof. J. R. Thorbecke，のち1840年内閣に列し，1849年から53年内務大臣就任）がシーボルト宛に書簡を送る。

○ 12月26日（11・28）出島にて，母アポロニアと伯父ロッツ宛の手紙を書く。

◇ 月日不詳，出島オランダ商館員 H.ビュルゲル自筆「長崎および江戸における1825年度の同時気温観察報告」，「1824年と1825年の江戸・長崎の気温観察」，「1826年江戸参府旅行における気象観測」を出島で執筆。

○ 月日不詳，この年江戸参府旅行の途上，江戸の魚市場で観察した魚類58種類を当時の和名（ローマ綴り字）で記載する。

○ 草稿『1826年江戸参府旅行途上，クロノメーターによる緯度および経度の観測値』を出島にて執筆。（注：片桐一男編『日蘭交流史　その人・物・情報』思文閣　2002年　228-246頁）。

○『日本産科学に関する若干の問題について長崎の門人医師美馬順三による回答』（独文）を叔父アダム・エリアス・フォン・シーボルト創立の「産科学会

〔図20〕ケンペル・ツュンベリー顕彰記念碑

〔図21〕シーボルト顕彰薬園（植物園跡）

雑誌」（第６巻第３部）に掲載する。

○『日本語概略』（ラテン文）を「バタヴィア芸術科学協会雑誌」（第11巻）に掲載。同書は1853年ライデンで再版。

○ 序文を加えた再版『日本博物誌』（ラテン文）をヴュルツブルグで刊行。

◇ マラッカ・シンガポールなどイギリス領となる。

○ 出島植物園内にケンペル（Kämpfer）とツュンベリー（Thunberg）顕彰の記念碑を建立。

1827年（文政10）　31歳

＊ １月13日（12・16）メイ？（J. May）がシーボルト宛に書簡を送る。

＊ １月23日（12・26）オランダ領東インド総督府のボイエ博士（Dr. H. Boje）がバイテンゾルフからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ２月１日（１・６）母アポロニアと伯父 F. J.ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ ２月22日（１・27）長崎にて，高橋作左衛門景保宛に手紙を書く。

○ ３月７日（２・10）舌疽の手術を出島で行なう。

○ ３月17日（２・20）出島にて，クロノメーターにより経度観測。手稿／小冊子『クロノメーター Hatton & Harris No/65.による観測値，1825年10月10日より３月17日』

○ ３月15日（２・18）シーボルトの誕生を祝い，門人たちが鳴滝塾で宴会を催す。

○ ３月29日（３・３）長崎郊外の岩屋山へ調査旅行。出島オランダ商館員 H. ビュルゲルと C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴらが同行。岩屋山周辺の植生・地理および地質学的観察・民俗学的観察などする。草稿『岩屋山への調査旅行』を執筆（注：石山禎一『シーボルト』84-98頁）。草稿『３月３日の節句について』を H.ビュルゲルが執筆。一部シーボルトが加筆。『３月の雛の節句用道具』・『家庭用具，銅製品，漆器について』をビュルゲルが執筆。

＊ ４月19日（３・24）高橋作左衛門景保がシーボルト宛に書簡を送る。

△ ４月25日（３・30）大槻玄沢没する（享年70歳）。

○ ５月31日（５・６）其扇との間に女子（楠本イネ）生まれる。

○ ６月７日（５・31）吉雄幸載宅に出向き，患者三人を診療する。

○ ６月15日（５・21）長崎にて，高橋作左衛門景保宛に手紙を書く。

○ 6月19日（5・25）吉雄宅で陰嚢治療をする。

＊同日，デ・コーク（de　Kork，のちのオランダ領東インド総督）がソヴァカスタ（Sowakasta）からシーボルト宛に書簡を送る。

○ 6月20日（5・26）オランダ領東インド総督府の決議で，1828年のバタヴィア向け帰帆船で帰還するという，シーボルトの要望は承認される。これに関して，オランダ領東インド総督府秘書長がバタヴィアから「オランダ領東インド総督決議録抜粋」を送る（注：『シーボルトの日本報告』223-225頁）。

○ 6月23日（5・29）吉雄宅へ病人見舞いに出向く。

○ 6月24日（5・30）長崎にて，高橋作左衛門景保宛に手紙を書く。

○ 6月25日（6・2）西山御薬園へ薬草木の調査。草稿『幕府が長崎に栽培していた植物園に関する報告書』（独文と学名ラテン表記）を執筆（西山御薬園で調査した薬草木108種の記載あり）（注：石山禎一『シーボルト』101-104頁）。

＊同日　オランダ領東インド総督府のレンシング（D. Lensing）とレンゼン（G. Rensen）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 6月27日（6・4）草稿『前出島オランダ商館長デ・ステュルレルのバタヴィアからのシーボルト宛書簡』を書き写す。

＊同日　学友ハリッツ（ハルツ？）がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

◇同日　バタヴィア中央農業委員会長がバタヴィアから出島オランダ商館長宛に書簡を送る（注：『シーボルトの日本報告』225-227頁）。

＊6月28日（6・5）オランダ領東インド総督侍医 G. J. コルマン博士とヨゼフィーネ・コルマンがバイテンゾルフからシーボルト宛に書簡を送る（注：『鳴滝紀要』17号　111-115頁，およびヴォルフガング・ゲンショレク著／眞岩啓子訳『評伝シーボルト』講談社　1993年　142頁）。

○ 6月29日（6・6）出島で門人たちに製薬法を教える。

＊6月30日（6・7）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊同日　オランダ領東インド総督侍医 G. J.コルマン博士がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。また同総督府のファン・テン・ブリンク商会がシーボルト宛に精算書を送る。同じく，オランダ船（オンデルネーミング号）船長 H. M.レルツがバタヴィアからシーボルト宛に日本に運ばれた物品に対する請求書を送る。

＊6月　オランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンクがバタヴィアから

シーボルト宛に請求書を送る。

＊ 7月19日（6・26）高橋作左衛門景保がシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 7月22日（6・29）ヴュルツブルグ地方裁判所所長ゲオルグ・デエルファー（シーボルトのメナーニア会友人）がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

◇ 7月26日（閏6・3）オランダ船デ・ハンデル・マートシャピイ（De Handel Maatschappij）号，船長ウイレルス（P. H. Willers）とデ・ロッテルダム（De Rotterdam）号，船長デ・フリース（J. W. F. de Vries）の両船が長崎に入港。

○ 7月27日（閏6・4）高良斎・鈴木周一・戸塚静海・伊東昇迪・岡研介・石井宗謙・松木雲徳・高野長英・中尾玉振・二宮敬作の門人らが出島に出向く。

＊ 8月1日（閏6・9）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 8月4日（6・12）大徳寺に唐桐（梧桐）あるのを知り，伊東昇迪・二宮敬作に同寺より貰うよう依頼する。

＊ 8月31日（7・10）ドイツ人植物学者ハッシカール（J. K. Hasskarl）がエルランゲン（Erlangen）からシーボルト宛に書簡を送る。

○ 9月10日（7・20）オランダ領東インド総督府がシーボルトをバタヴィアへ帰還させることを決定。

○ 9月24日（9・4）伊藤圭介，前年シーボルトから長崎遊学を勧められ，尾張を出立（8・13）して長崎に到着。大通詞見習吉雄権之助の塾に入り，そこに寄寓してシーボルトのもとに通い勉学するとともに，シーボルトの日本研究を助ける。

＊ 9月25日（9・5）長崎の唐通詞（Tsin wen Poe）がシーボルトの治療で救われたことへの感謝を，シーボルト宛に書簡を送る。

○ 10月日付不詳，長崎郊外の千々山へ調査旅行する。

○ 草稿『報告1827年10月調査旅行。長崎千々山への調査』（独文）執筆（注：『新・シーボルト研究』Ⅰ　八坂書房　2003年　249-262頁）。

＊ 10月20日（8・30）スイスの植物学者ドゥ・カンドル（de Candoll）がジェノバ（Genova）からシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 11月28日（10・10）門人高良斎がシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』27頁）。

○ 11月　『全日本経済植物概要』（ラテン文）を完結（注：最終原稿はドイツのボフ

ム大学図書館の「シーボルト関係資料」の中にある)。

○ 12月１日（10・13）出島にて，オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン宛の手紙と報告書を書く（注：『シーボルトの日本報告』228-235頁)。

○ 12月３日（10・15）出島にて，オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン宛の手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』245-247頁)。

○ 12月11日（10・23）出島にて，バイテンゾルフの植物園園長 C. L.ブルーメ宛の手紙を書く。また，バタヴィア中央農業委員会宛の手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』243-245頁)。

○ 12月15日（10・27）上記の『全日本経済植物概要』と同じ報告をパリのアジア協会に送る。同報告は『新アジア雑誌』第３巻に1829年に翻訳印刷される。出島からオランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン宛に手紙と「出島植物園よりバタヴィアへ送付する植物リスト」を書く（注：『シーボルトの日本報告』235-242頁)。また，バタヴィアのバイテンゾルフ植物園園長 C. L.ブルーメ宛の手紙を書く。

＊ 同日，阿波国・薬種商小西吉兵衛がシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』26頁)。

○ 12月20日（11・３）『日本よりの報告』（ネース・フォン・エーゼンベック教授宛の報告書）に食用植物250種を記述した論文を付けて，出島からバタヴィアへ送付する。翌年（1828年)「植物誌もしくは植物新聞」レーゲンスブルグ，第11年度に掲載。1842年「植物学記録集」第43巻，ライプツィヒ（Leipzig)，1842年に再掲載（注：『評伝シーボルト』139-141頁)。

○ 同日　出島にて，母アポロニア宛の手紙を書く。

○ 12月25日（11・８）長崎にて，高橋作左衛門景保宛に手紙を書く。

○ 12月26日（11・９）出島にて，母アポロニアおよび伯父ロッツ宛の手紙を書く（別筆跡にて1828年10月１日あり)。(注：『鳴滝紀要』19号　44-48頁)。

○ 12月日付不詳，出島にて，オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン宛に手紙を書く（注：『シーボルトの日本報告』247-252頁)。

○ ロンドン所在，王立協会正会員。

◇ フランス，アルジェリア侵略開始。

◇ イギリス，ムガール帝国に従属を要求。

1828年（文政11）　32歳

＊ 1月1日（11・15）伯父ロッツと母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 1月23日（12・7）門人伊東昇迪が長崎を去るにあたり，眼科器具一式を贈る。

〈シーボルト事件ー発覚から処分までの経過ー〉

○ 2月3日（12・18）長崎にて，高橋作左衛門景保宛に手紙を書く。

○ 2月25日（1・11）出島にて，江戸の間宮林蔵宛の手紙を書く（注：片桐一男「事件の発端となったシーボルトの手紙－阿蘭陀通詞中山作三郎が手控えたシーボルトの手紙と鷹見泉石の手紙控え－」『洋学史研究』22号　2005年。『シーボルトの日本報告』255頁）。

○ 3月日付不詳，伊藤圭介が長崎での半年滞在を終えて帰郷の途につく。帰郷に際してシーボルトはツュンベリー著『日本植物誌』および『日本紀行』に掲載のツュンベリーの肖像を贈る。

○ シーボルト任期終了で帰国予定。

○ 3月30日（2・15）シーボルトより高橋作左衛門景保宛手紙と間宮林蔵宛小包を長崎から発送。

◇ 3月31日（2・16）「オランダ領東インド総督決議録抜粋」の内，出島オランダ商館長宛のシーボルト関係の記述を受領する（注：『シーボルトの日本報告』255-256頁）。

○ 5月10日（3・27）シーボルトの第2回目の船荷がライデンに到着。

○ 5月11日（3・28）江戸の高橋景保宅に手紙が届く。高橋は同封の間宮宛の小包を届ける。

間宮林蔵は決まりにより小包を幕府に届け，高橋の身辺を中心に幕府の探索が始まる（注：片桐一男「事件の発端となったシーボルトの手紙」）。

＊ 6月11日（4・29）デ・コーク（のちのオランダ領東インド総督？）がマグダム（Magdam）からシーボルト宛に書簡を送る。

◇ 6月17日（5・6）「オランダ領東インド総督決議録抜粋」の内，出島オランダ商館長宛のシーボルト関係の記述を受領する（注：『シーボルトの日本報告』256-257頁）。

○ 6月18日（5・7）出島にて，伊藤圭介宛に手紙を書く。

＊ 6月23日（5・12）オランダ領東インド総督侍医G. J.コルマン博士がバイテンゾルフからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 6月28日（5・17）オランダ領東インド総督府のD.レンシングがバタヴィアからシーボルト宛書簡を送る。

＊ 7月3日（5・22）オランダ領東インド総督府のフリッツ（Frits）がヴェルテフレーデン（現ジャカルタ内）からシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 7月5日（5・24）オランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンク商会がバタヴィアからシーボルト宛に書簡と請求書を送る。

＊ 7月6日（5・25）オランダ領東インド総督府のフリッツがヴェルテフレーデンからシーボルト宛に書簡を送る。

◇同日　オランダ領東インド総督府がバタヴィアからオランダ財務局，会計院，植民地物産・民需品倉庫長，出島オランダ商館長宛に，「オランダ領東インド総督決議録抜粋」を送る（注：『シーボルトの日本報告』257-258頁）。

＊ 7月20日（6・9）オランダ領東インド総督府のヘルヴィグ？（Herwig）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 7月28日（6・17）オランダ領東インド総督府のクラマー・モルチ（Cramer Morch）がヴェルテフレーデンからシーボルト宛に書簡を送る。

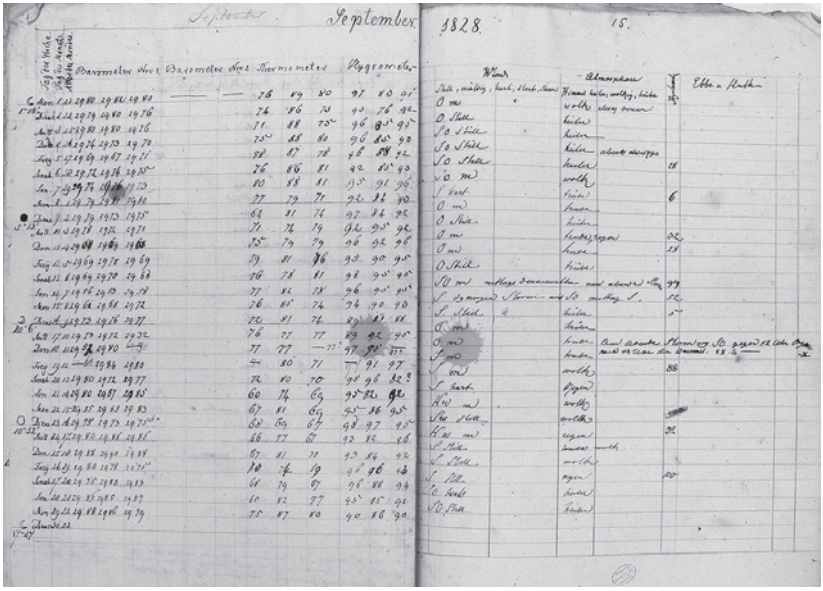
○ 8月6日（6・26）オランダ船コルネリウス・ハウトマン（Cornelius Houtman）号，船長デ・ヨング（G. de Jong）長崎に入港。入港手続き〈出帆は10月1日（8・23）と予定〉。

＊ 9月1日（7・22）オランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンク商会がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 9月17日（8・9）夜半12時頃より翌朝5時ごろまで長崎地方は猛烈な暴風雨が来襲。出島植物園に植えられていた1,000種以上の植物は風と高波で損傷。

○ 9月18日（8・10）出島壊滅。出航予定の同船が台風で稲佐村の割石付近に座礁。船に積み込まれていたのはバラストとして最初に船底へと運び入れた銅500ピコルのみ。積み込む予定の荷物は，まだ出島の倉庫に保管。これより以前，すでに江戸より御書物奉行兼天文方筆頭高橋景保とシーボルトの間に不審の筋ありとの知らせが長崎奉行に達する。

＊ 9月19日（8・11）商館長メイランがシーボルト宛に書簡を送る。



〔**図22**〕「1828年１月～９月の気象観測」の９月分（ボフム大学図書館所蔵　1.142）

○ ９月26日（８・18）オランダ船の滞留延長を申請。

○ ９月29日（８・21）草稿『雑記風メモ』（蘭文）執筆

○ ９月30日（８・22）シーボルト引継ぎ準備。

○ 10月１日（８・23）出島オランダ商館員 H.ビュルゲルの公務開始。

○ 10月２日（８・24）２度目の暴風雨が来襲。

○ 10月14日（９・６）長崎奉行本多佐渡守正収の着任。

○ 10月28日（９・20）シーボルトの間宮林蔵宛の手紙を返却。シーボルトの手紙への警告。

○ 10月31日（９・23）奉行職の事務引継ぎを終えて，大草能登守高好の帰府。

○ 10月日付不詳，出島オランダ商館員 C.　H.ドゥ・ヴィルヌーヴがリスト“Lotery”を出島で執筆。

○ 11月９日（10・３）オランダ船浮上作業着手。

○ 11月13日（10・７）出島の荷物盗難事件調査。検使によるドールン倉庫（口蔵）の調査。

○ 11月16日（10・10）高橋景保の捕縛・家宅捜査。

○ 11月17日（10・11）高橋景保尋問。町奉行筒井伊賀守はシーボルトに渡った日本地図を取戻そうと景保をして大通詞末永甚左衛門，小通詞助吉雄忠次郎宛書面を送らせる。

○ 11月19日（10・13）浅草の天文台下の高橋景保宅を捜査。ロシア提督・探検旅行家クルーゼンシュテルンの『世界周航記』４冊，同和解16冊，銅版和蘭地図12枚１冊を押収。

○ 11月22日（10・16）高橋景保尋問。

○ 11月24日（10・18）高橋景保家宅捜査。

○ 11月27日（10・21）シーボルトの門人へ警告。高良斎ら出島の出入り禁止。

○ 12月４日（11・２）出島にて，オランダ商館長（G. F.メイラン）宛の手紙を書く。

○ 12月７日（11・１）高橋景保の逮捕情報が長崎に伝わる。夜，八つ刻，長崎奉行本多佐渡守正収が小通詞助吉雄忠次郎を，秘かに奉行所に招き，シーボルトが所持しているはずの日本地図および国禁の品々を内々に取り上げるよう命じ，もしシーボルトがそれに応じなければ奉行の職権でそれらを没収するであろうと申し渡す。

○ 12月８日（11・２）夜明けとともに，吉雄忠次郎は出島商館のシーボルトの部屋に行き，一件が幕府に露見したことを告げ，直ちに高橋景保から贈られた日本地図を奉行所へ差し出すよう勧めるがシーボルトは容易に応ぜず保留。

○ 12月９日（11・３）朝，蝦夷の地図の原図を吉雄忠次郎に渡す。

〔**図23**〕カラフト島図（国立公文書館所蔵）右上に「シーボルト所持品之内より取上候」の貼紙がある

○ 12月16日（11・10）検使が出島に出張し捜査。商館長およびシーボルトを尋問。家宅捜索も行なわれる。通詞の吉雄忠次郎らが町年寄預かりとなる。同日，草稿『出島，1828年12月16日付日記の抜粋』（蘭文）を執筆。

○ 12月17日（11・11）出島を捜査。耐火倉庫を封印。

○ 12月18日（11・12）検使らシーボルトの家宅捜査。

○ 12月21日（11・15）オランダ船浮上作業完了。

○ 12月23日（11・17）長崎奉行本多佐渡守正収がシーボルトの日本出発を差止めの命令書を出す（注：『シーボルトの日本報告』258頁）。

○ 12月24日（11・18）オランダ船へ銅500ピコル積み込み開始。積荷作業も行なう。

○ 12月28日（11・22）王立レオポルディーナ自然科学アカデミー総裁ネース・フォン・エーゼンベック教授がシーボルトの1827年12月20日の書簡を，植物学雑誌『植物誌』（フローラ）に紹介。

○ 12月30日（11・24）シーボルト尋問。吉雄忠次郎・末永甚左衛門・名村八太郎・岩瀬弥右衛門・岩瀬弥七郎ら尋問。

＊ 12月日付不詳，オランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンク＝レインスト（Reynst）商会がバタヴィアからシーボルト宛に「日本商品に対する請求書」などを送る。

＊ 12月日付不詳，オランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンク商会がバタヴィアからシーボルト宛に請求書を送る。

○ 月日不詳，シーボルト自筆「1827年９月23日より1828年９月30日に至る一年間の出島における気象学的観測表」を作成。

◇ 月日不詳，出島オランダ商館員 H. ビュルゲル自筆，シーボルト自筆（注記）「1827年９月から12月までの気象観測」，「1828年１月から９月までの気象観測」，「出島における気象学的観察の指針」を執筆。

○ 月日不詳，地図『シーボルト作成長崎港地図，1828年』

○ 月日不詳，草稿『フィリップ・フランツ・フォン・シーボルトのオランダ領東インド政庁命令による日本への旅行。1823，1824，1825，1826，1827，1828年』をH.ビュルゲルが執筆。

◇ オランダがニューギニアに植民。露土戦争起こる。

◇ 葛飾北斎『富嶽三十六景』成る。

◇ 伊藤圭介『泰西本草名疏』刊。

1829年（文政12）　33歳

＊ １月７日(12・２)ドイツ人の東洋文献学者ヨーゼフ・ホフマン(Joseph Hoffmann)がシュトゥットガルト（Stuttgart）からシーボルト宛に書簡を送る。

○ １月23日（12・18）幕府の命令で，シーボルト幽閉される。

○ １月28日（12・23）シーボルト出国禁止の通告を受ける。シーボルト尋問。

○ １月29日（11・23）シーボルト尋問。

○ １月30日（12・25）オランダ船２月13日出帆の通告を受信。稽古通詞荒木豊吉・内通詞小頭見習菊谷藤太・同田中作之進が町預けとなる。

○ １月31日（12・26）門人二宮敬作・高良斎・渡辺幸造の三人も町預けとなる。画家の川原慶賀（登与助）は入牢を申し付けらる。

○ ２月２日（12・28）茂伝之進・西儀十郎・石橋助十郎・中山作三郎の四人の通詞が奉行所の命令により，シーボルトを尋問するために出島商館を訪れる。

○ ２月６日（１・３）オランダ船最後の銅積み込み完了。シーボルトへ23ヵ条の尋問。同日，手稿・草稿『本多佐渡守発シーボルト宛23項目の質問状』（蘭文）を執筆（シーボルトの口述が洋紙６枚に記載され，最後に彼の署名あり）。

○ ２月８日（１・５）シーボルトの所持品を押収。同日，オランダ商館長 C. F.メイランが長崎奉行本多佐渡守宛にシーボルト事件に関する願書を提出する。

○ ２月９日（１・６）日本への帰化願を提出するが，却下される。

○ ２月12日（１・９）草稿『シーボルトに対する尋問項目』（蘭文）を執筆（シーボルトとメイラン両名の署名あり）。

○ 同日　出島にて，ライデンの王立自然史博物館館長コンラート・ヤコブ・テミンク（Coenraad Jacob Temminck）宛に第３回の船荷65箱についての手紙を書く（注：『シーボルトと日本動物誌』251-255頁。同関係記述が『シーボルトの日本報告』267-279頁にある）。

○ ２月13日（１・10）シーボルトの妻其扇，奉行所にて尋問。このあと２回尋問。

○ 同日　オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレン宛に，「1828年度分報告書」および「1823年より1828年10月１日まで，日本における博物学調査のために宛てられ，（交付された）調査費の使途明細報告総括」を書く。同報告書を商館長

メイランが受領（注：『シーボルトの日本報告』258-269頁）。

○ 同日　出島からバタヴィアのオランダ領東インド総督府高官宛の手紙を書く。

○ ２月14日（１・11）シーボルトの所持品を押収。

○ ２月15日（１・12）出島にて，オランダ領東インド総督（ファン・デル・カペレン）宛の手紙と報告書を書く。同報告書は２月19日に商館長メイランも受領（注：『シーボルトの日本報告』299-305頁）。シーボルトおよび出島オランダ商館員フェルケルク・ピストリウス（P. W. Verkerk Pistorius）が出島から前出島オランダ商館員オーベルメール・フィッシャー（Overmeer Fischer）に対する借用書を受け取る。

○ ２月16日（１・13）草稿『シーボルトに対する23尋問と回答を含む』（独文）を執筆。

○ ２月17日（１・14）シーボルトの所持品を押収。

○ ２月19日（１・16）シーボルト尋問。

○ ２月20日（１・17）出島にて，母アポロニア宛と伯父ロッツ宛に前年の長崎地方に来襲の暴風雨，事件による捜査などに関する手紙を書く（注：『鳴滝紀要』19号48-51頁）。

○ ２月21日（１・18）シーボルトの資材倉庫を捜査。

○ ２月22日（１・19）オランダ船，全荷物積み込み完了。甲板で「御条目」を朗読。

○ 同日，出島にて，母アポロニア宛に出島拘留と長崎奉行の尋問に関する手紙を書く（この手紙は，２日前の２月20日に書かれた縮約複本で，同年７月17日母親のもとに届く）。（注：『鳴滝紀要』19号　52頁）。

○ ２月24日（１・21）オランダ船コルネリウス・ハウトマン号バタヴィアへ向けて出帆。

○ ２月27日（１・24）出島にて，母アポロニア宛と伯父ロッツ宛の手紙を書く。

○ ２月28日（１・25）出島にて，オランダ商館長（C. F.メイラン）宛の手紙を書く。

○ ３月３日（１・28）出島にて，オランダ商館長（G. F.メイラン）宛の手紙を書く。

○ ３月４日（１・29）シーボルト家宅捜査。葵紋付帷子・九州辺の地図など押収。

○ ３月８日（２・４）商館長 G. F.メイランがシーボルトを説諭。シーボルト上申。

◇ ３月20日（２・16）高橋作左衛門景保獄死。

◇ ３月22日（２・18）御目付本目帯刀ら牢屋敷にて，景保の死骸検分（翌日死骸を塩漬け）。同日，オランダ商館長 C. F.メイランが長崎奉行本多佐渡守宛にシーボル

トの尋問についての申立書を提出する。

○ 3月中頃　シーボルトの答弁書提出される。

◇土生玄碩・稲部市五郎ら，江戸と長崎で合計55名の多数が事件に連座し，獄に繋がれる。

＊ 6月24日（5・23）ステルク博士？（Dr. Sterk）がマゲラーン（Magelaan）からシーボルト宛書簡送る。

＊ 6月27日（5・26）オランダ領東インド総督府医師メッツ博士（Dr. A. Metz　前ヴュルツブルグ大学医学部教授）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 6月30日（5・29）オランダ領東インド総督府のフリッツ（Fritz）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 7月11日（6・11）バタヴィア科学芸術協会がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 7月12日（6・12）前出島オランダ商館員オーベルメール・フィッシャーがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 7月13日（6・13）オランダ領東インド総督府のD.レンシングがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 7月14日（6・14）オランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンク＝レインスト商会，ギィシング（Gijsing）がバタヴィアからシーボルト宛の書簡（回状）を送る。また同総督府のファン・テン・ブリンク商会が請求書を送る。ヘレナ（De Helena）号の船長ダニエル・グリム（Daniel Grim）がバタヴィアからシーボルト宛に送り状を発送。

＊ 7月22日（6・22）オランダ領東インド総督侍医G. J.コルマン博士がバイテンゾルフからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 7月24日（6・24）シーボルトが江戸参府旅行中に入手した品々の件についての答弁書を提出。

○ 8月19日（7・20）オランダ船デ・ヘレナ号，船長ダニエル・グリムとデ・ジャワ（De Java）号，船長ファン・デル・ツェープ（J. van der Zweep）長崎に入港。

○ 8月28日（7・29）シーボルトが葵紋服を入手した件についての答弁書を提出。

＊ 9月10日（8・13）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 9月14日（8・17）商館長G. F.メイランが出島からシーボルト宛に書簡（機密文

書）を送る。

○ 9月18日（8・21）出島オランダ商館長（G. F.メイラン）宛の手紙を書く。

＊ 同日　商館長メイランが出島からシーボルト宛に書簡を送る。

○ 同日　シーボルトの第3回の船荷がライデンに到着。

＊ 9月19日（8・22）商館長G. F.メイランが出島からシーボルト宛に書簡を送る。

○ 9月26日（8・29）草稿『G. F.メイランの出島からのシーボルト宛書簡』を書き写す。

＊ 9月28日（9・1）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 9月29日（9・2）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

◇ 10月4日（9・7）長崎奉行本多佐渡守正収がビュルゲルの江戸参府差止め命令書を出す。

○ 10月22日（9・25）シーボルトに対して「日本御構」（国外追放，および再入国禁止）の判決が下る。このあと退去にそなえ，其扇（22歳）・お稲（2歳）母子の面倒を門人二宮敬作らに依頼するなど奔走する。

＊ 10月30日（10・3）門人高良斎がシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』28-30頁）。

○ 同日　出島にて『請求リスト』を作成。

＊ 11月10日（12・5）荒木豊吉がシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 11月19日（10・23）商館長G. F.メイランが出島からシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 11月21日（10・25）門人石井宗謙がシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』39頁）。

＊ 12月1日（11・6）門人高良斎がシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』32-33頁）。

＊ 12月2日（11・7）N. J.卯三郎がシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』54-55頁）。

＊ 12月7日（11・12）松村直之助がシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』55頁）。

＊ 12月11日（11・16）門人石井宗謙がシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』40頁）。

＊ 12月20日（11・25）長崎から高良斎，二宮敬作，轟武七郎，石井宗謙，鈴木周一

らの門人が日本研究に関してシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』14頁）。

＊ 同日　出島オランダ商館員マニュエル（S. G. Manuel）が出島からシーボルト宛に書簡を送る。

○ 12月22日（11・27）出島にて，商館長 G. F.メイラン宛の手紙を書く。

○ 12月30日（12・５）出島にて，Tojoskej（登与助）に関する領収書（川原慶賀の領収書か），シーボルト他の領収書と借用証など受け取る。判決によりジャワ号で出島を出港する。

＊ 同日　門人高良斎がシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』33-34頁）。またこの日，荒木豊吉もシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』51頁）。

＊ 12月日付不詳，門人石井宗謙がシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』41頁）。

○ 12月31日（12・６）風待ちで小瀬戸に停泊中，妻其扇・娘イネ・二宮敬作・高良斎・石井宗謙・ブエモン（青貝屋武右衛門？）らと会う。この日，ジャワ号船上にて，母アポロニア宛と伯父ロッツ宛の手紙を書く（翌1830年６月１日にヴュルツブルグに届く）。（注：『鳴滝紀要』19号　52-53頁）。

○ 月日不詳，この年採集の「日本産魚類約170種の学名並びに形態的特徴」（注：原資料はボフム大学図書館所蔵）を執筆する。

○ 月日不詳，「1823年から1828年の間に日本で作成された記述類一覧」，「1827-28年度に与えられた博物学的調査費使途明細報告書」，「下名〈シーボルト〉の計算〈支払い〉で収集し，差し当たり王立博物館に宛てた，学術調査のための日本の珍奇品収集物リスト」を作成する（注：『シーボルトの日本報告』279-299頁）。

○ 月日不詳，論文『日本人種論』（仏文）を「アジア協会雑誌」に掲載。

○ 月日不詳，論文『日本の植物学に関する状態，アジサイ属の論文と本草学に関する日本の文献の若干の試論付。日付，1825年12月18日出島にて』（独文）。ボンの帝立レオポルトカール・アカデミーの「自然の不思議に関する物理医学新紀要」（第14巻　第２部）に掲載。

◇ 江戸大火，下町一帯全焼。

1830年（天保１）　34歳

○ １月１日（12・７）シーボルトが小舟で小瀬戸に上陸し，妻子・門人らに別れを告げる。

○ １月２日（12・８）出島オランダ商館員 C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴがジャワ号にいるシーボルトに別れの挨拶にくる。

○ １月３日（12・９）日本を離れバタヴィアに向かう。

○ 日本で収集の文学的・民族学的コレクション5,000点以上のほか，哺乳動物標本200・鳥類900・魚類750・爬虫類170・無脊椎動物標本5,000以上・植物2,000種・植物標本12,000を持ち帰る。

◇ １月10日（12・16）土生玄碩が改易。その子玄昌はその罪により切米召放の申し渡し。

＊ １月27日（１・３）パウン H. W. Paün がミュンヘンからシーボルト宛に書簡を送る。

○ １月28日（１・４）バタヴィアに到着。オランダ領東インド総督・陸軍将軍ヤン・ファン・デン・ボッシュ（Jan van den Bosch）にシーボルト事件の顛末を報告する。

＊ ２月６日（１・13）前出島オランダ商館員オーベルメール・フィッシャーがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

○ ２月９日（１・16）バタヴィアにて，母アポロニア宛の手紙を書く。

＊ ２月10日（１・17）オランダ領東インド総督府のバウムハウエル（C. M. Baumhauer）とディアン（Dian）がバタヴィアからシーボルト宛に短信を送る。前オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

○ ２月11日（１・18）バタヴィアにて，草稿『オランダ領東インド総督府宛の報告書下書き』を執筆。

＊ ２月13日（１・20）オランダ領東インド総督府の D.レンシングがクラマート（Kramat）からシーボルト宛に書簡を送る。

○ ２月17日（１・24）バタヴィアにて，草稿『オランダ領東インド総督府宛の報告書下書き』を執筆。

＊ 同日　オランダ領東インド総督府のセリエール？（G. de. Seriere）がバタヴィア近郊スダングカッシオ？（Sudangkassio）からシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ２月18日（１・25）オランダ領東インド総督秘書官がバタヴィアからシーボルト

宛に書簡を送る。

○ 2月20日（1・27）バタヴィアにて，草稿『オランダ領東インド総督府宛の報告書下書き』を執筆。同日，バタヴィアにて，母アポロニアと伯父ロッツ宛の手紙を書く。

＊ 2月24日（2・2）オランダ国土産業担当理事がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 2月25日（2・3）バタヴィアにて，草稿『オランダ領東インド総督府宛の報告書下書き』を執筆。

＊ 同日，オランダ領東インド総督府秘書長官がバタヴィアからシーボルト宛に，「オランダ領東インド総督決議録抜粋」を送る（注：『シーボルトの日本報告』306-307頁）。

＊ 2月26日（2・4）オランダ領東インド総督府のD.レンシングがクラマートからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 2月27日（2・5）オランダ領東インド総督府のD.レンシングがクラマートからシーボルト宛に書簡を送る。ティーデマンス（Tiedemans）がシーボルト宛に書簡を送る。

○ 3月4日（2・10）バタヴィアにて，草稿『オランダ領東インド総督府宛の報告書下書き』を執筆。

＊ 同日，オランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンク商会がバタヴィアからシーボルト宛に請求書を送る。

＊ 3月9日（2・15）オランダ領東インド総督府のメドハースト（W. H. Medhurst）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 3月15日（2・21）バタヴィアからオランダに向かう。

＊ 3月20日（2・26）オランダ領東インド総督府のシーベル？（G. F. Siebel）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 4月14日（3・22）ドイツ人の東洋文献学者ヨーゼフ・ホフマンがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 4月30日（3・28）オランダ領東インド総督府のファン・テン・ブリンク商会がバタヴィアからシーボルト宛に請求書を送る。

◇ 4月28日（3・26）江戸で高橋作左衛門らに判決くだる。作左衛門は死罪（すで

に獄死）その子どもらは遠島。

＊ 5月9日（閏3・17）オランダ領東インド総督府のW. H.メドハーストがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

◇ 5月17日（旧閏3・25）長崎で関係者に判決下る。二宮敬作は江戸御構・長崎払い，高良齋は居所払い，川原慶賀は叱責される。

◇ 5月27日（4・6）馬場為八郎・稲部市五郎・吉雄忠次郎ら長崎から江戸へ護送。その後，地方の諸藩へ預かりとなる。

＊ 6月10日（4・20）シェル・デル・バラベイ（Cher der Paravey）がロンドンからシーボルト宛書簡送る。

＊ 6月30日（5・10）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 7月5日（5・15）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

3．ヨーロッパでの日本研究と活動

1830年（天保１）　34歳

○ 7月7日（5・17）オランダのフリッシンゲン港に帰港。草稿『ジャヴァ号船上にて1830年7月7日の記録』（蘭文）を執筆。同日，ハーグにて，母アポロニアと伯父ロッツ宛の手紙を書く。

○ 7月10日（5・20）ハーグに滞在。ハーグにて，母アポロニアと伯父ロッツ宛の手紙を書く。

＊ 7月12日（5・22）叔父ヨアヒム・ロッツがケーニッヒホーヘンからシーボルト宛に書簡を送る。

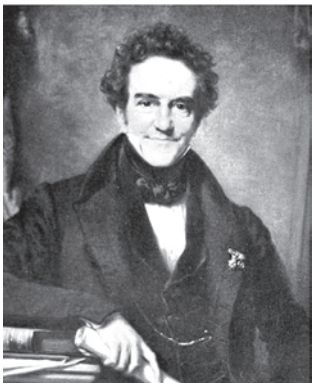
＊ 7月13日（5・23）オランダ植民地省の水利，産業担当大臣がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 7月17日（5・27）アントワープで同郷人の東洋文献学者ヨーゼフ・ホフマンと出会う。ホフマンは以後日本研究の協力者となる。

＊ 7月18日（5・28）スイスの植物学者ドゥ・カンドルがジェノバからシーボルト宛に書簡を送る。

W.クレッチグハウゼン（Cretzighausen）がフランクフルトからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 7月20日（6・1）アントワープにて，動物学者C.J.テミンク宛の手紙を書く。
＊ 同日，警察署がシーボルト宛に領収書を送る。
○ 7月21日（6・2）アントワープにて，母アポロニアと伯父ロッツ宛の手紙を書く。
＊ 7月23日（6・4）前オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 7月27日（6・8）オランダ領東インド総督府のW. H.メドハーストがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 7月30日（6・11）クレッチグハウゼンがフランクフルトからシーボルト宛書簡送る。
○ 7月31日（6・12）アントワープにて，ライデンの王立自然史博物館館長C.J.テミンク宛に手紙を書く（注：『シーボルトと日本動物誌』256頁）。



〔図24〕C. J.テミンクの肖像
（ライデン国立自然史博物館所蔵）

◇ 8月2日（6・14）オランダ船アンナ・カタリーナ（Anna Catharina号），船長フェール（S. H. Veer）とネーランド・コーニンヘン（Neeland Koningen）号，船長フェルローブ（W. Verloop）の両船が長崎に入港。
○ 日本から持ち帰ったコレクションのうち，原稿と民族学関係の資料はアントワープに，博物学関係のコレクションの一部はブリュッセルとゲントに保管されていた。
○ 8月12日（6・24）ブリュッセルにて，母アポロニアと伯父ロッツ宛の手紙を書く。

＊ 8月17日（6・29）前オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがボーレンホウベンから，またオランダ植民地，水利，産業担当大臣がハーグから，王立自然史博物館館長C. J.テミンクと国立植物標本館館長C. L.ブルーメがライデンからそれぞれシーボルト宛に書簡を送る。

○ 8月19日（7・2）ゲントにて，母アポロニアと伯父ロッツ宛の手紙を書く。

○ 8月23日（7・6）ゲントにて，母アポロニアと伯父ロッツ宛の手紙を書く。

＊ 9月9日（7・23）ドラスディエール教授（Prof. Dr. Drasdier）がブリュッセルからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 9月10日（7・24）オランダ教育・芸術・科学局長ファン・エウイック（van Ewyck）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 9月12日（7・26）ドイツ人東洋学者・パリ大学東洋語教授クラプロート（J. H. Klaproth）がパリからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 9月13日（7・27）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 9月17日（8・1）オランダ教育・芸術・科学局長ファン・エウイックがハーグからシーボルト宛に書簡を送り，ベルギーにあるコレクションの資料を持ち帰るようシーボルトに委任する。

＊ 9月18日（8・2）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 9月20日（8・4）ライデンにて，プロイセン王国教育医学省宛の手紙を書く。

＊ 同日，ガエーデ（H. M. Gaede）がリージュ（Liege）からシーボルト宛に書簡を送る。

○ 9月21日（8・5）ハーグにて，母アポロニアと伯父ロッツ宛の手紙を書く。

○ 9月22日（8・6）ハーグにて，母アポロニア宛にライデン大学教授職についての手紙を書く。

＊ 9月24日（8・8）ファン・ハル教授（Prof. van Hall）がフロニンヘン（Groningen）からシーボルト宛に書簡を送る。

○ 10月5日（8・19）ゲントにて，母アポロニアと伯父ロッツ宛の手紙を書く。

＊ 10月13日（8・27）グリル（Grille）がパリからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 10月中旬，ブリュッセルにある資料をライデンに搬入する（ヘントの資料は1841年に返却さる）。

＊ 10月26日（9・10）其扇が長崎からシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト

関係書翰集』60-64頁）。

＊ 10月28日（９・12）プレイスラー F. Preysler がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。

◇ 10月，商館長メイランの後任ヤン・ウィレム・フレドリック・ファン・シッテルス（Jan Willem Fredrik van Citters）が出島商館長に着任（在任：1830年11月１日～1834年12月１日）。

＊ 11月７日（９・22）オランダ領東インド総督府のティシュ（G. J. Teitsch）がヴェルテフレーデン（現ジャカルタ）からシーボルト宛に書簡を送る。

○ 11月10日（９・25）ライデンにて，母アポロニアと伯父ロッツ宛の手紙を書く。

＊ 11月13日（９・28）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 11月15日（10・１）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 11月16日（10・２）ライデンにて，出島オランダ商館員 H. ビュルゲルと C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴ宛の手紙を書く。

＊ 11月19日（10・５）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 11月20日（10・６）オランダ陸軍司令部査察官ベルナルド（J. C. B. Bernard）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 11月日付不詳，門人石井宗謙が地図の一件（シーボルト事件）で連座した人々について，シーボルト宛に報告した書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』41-43頁）。

＊ 12月１日（10・17）母アポロニアがヴュルツブルグがらシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 12月12日（10・28）門人戸塚静海が長崎からシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』48-49頁）。

◇ 12月20日（11・６）出島オランダ商館員 H. ビュルゲルが出島にて，この年バタヴィアへ発送した「日本産動物の品名リスト」を作成する。

＊ 12月21日（11・７）荒木豊吉が長崎からシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』52-53頁）。

○ 12月22日（11・８）ライデンにて，出島オランダ商館員の H. ビュルゲルと C.H. ドゥ・ヴィルヌーヴ宛の手紙を書く。

＊ 12月23日（11・９）スイスの植物学者ドゥ・カンドルがジェノバからシーボルト宛に書簡を送る。

○ 12月25日（11・11）ライデンにて，「出島オランダ商館員 C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴに関連する物品リスト」を作成。

＊ 12月27日（11・13）ハンス・フォン（Hans von）Ed.がボンからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 12月29日（11・15）広瀬（轟）武七郎が長崎からシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』58-59頁）。この日，其扇も長崎からシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』64-66頁）。

＊ 12月30日（11・16）F.プレイスレルがアムステルダムからシーボルト宛に手形／借用書を送る。

＊ 12月31日（11・17）出島オランダ商館員 H.ビュルゲルが出島からシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 月日付不詳，其扇が長崎からシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』64-66頁）。

○『全日本経済植物概要』を「バタヴィア芸術科学協会雑誌」（第13巻Ⅰ-Ⅳ）に掲載。

◇ ベルギー独立戦争。パリに七月革命起こる。

1831年（天保２）　35歳

＊ １月１日（11・18）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ １月３日（11・20）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ １月８日（11・25）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ １月12日（11・29）前オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ １月14日（12・１）前オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

○ １月17日（12・４）ライデンにて，母アポロニア宛の手紙を書く。

＊ １月19日（12・６）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ １月23日（12・10）前出島オランダ商館員 C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ １月25日（12・12）オランダ領東インド総督府の G. J.ティシュがヴェルテフレーデン（現ジャカルタ）からシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 1月28日（12・15）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 2月14日（1・2）王立レオポルディーナ自然科学アカデミー総裁ネース・フォン・エーゼンベック博士がブレスロウからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 2月19日（1・7）ドイツ人東洋学者・パリ大学東洋語教授 J. H.クラプロートがパリからシーボルト宛に書簡を送る。
○ 2月21日（1・9）ライデンにて，オランダ国王宛の手紙を書く。
○ 2月22日（1・10）『オランダ教育・芸術・科学局長（ファン・エウィック）宛の報告書』をライデンで執筆。
＊ 2月24日（1・12）ハークマン（G. J. Haakman）らがアムステルダムからシーボルト宛に保険証書を送る。
＊ 同日　フォン・ラ・ロッヘ（von la Roche）がウィーンからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 2月日付不詳，前出島オランダ商館員 C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。同じく，アムステルダムの貿易会社からシーボルト宛に送り状が送られる。
＊ 3月1日（1・17）前出島オランダ商館員 C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴがバタヴィアからシーボルト宛に書簡と決算書ならびに「シーボルト用輸送荷物一覧」を送る。
＊ 3月2日（1・18）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 3月3日（1・19）オランダ領東インド総督府のシャープ（A. Schaap）がバタヴィアからシーボルト宛に送り状を送付する。
○ 3月8日（1・24）草稿『大日本地図解説』および草稿『オランダ教育・芸術・科学局長（ファン・エウイック）宛の報告書』をライデンで執筆。
＊ 3月9日（1・25）ファン・デル・ブーン・メッシュ（A. H. van der Boon Mesch）がライデンから，またハンス・フォン・Ed.がボンからシーボルト宛に書簡を送る。
◇ 3月10日（1・26）前出島オランダ商館員 C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴがバタヴィアでシーボルトから送られた「物品リスト」を作成する。
○ 3月12日（1・28）「オランダ教育・芸術・科学局長宛の報告書」をライデンで執筆。
○ 3月14日（2・1）クライン・アデゲースト（Klein Adegeest）にて，母アポロニア宛の手紙を書く。「オランダ教育・芸術・科学局長（ファン・エウィック）宛の

報告書」をライデンで執筆。

＊３月16日（２・３）オランダ内務省教育・芸術・科学局がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊３月17日（２・４）オランダ国務大臣クリフォード（G. G. Clifford）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。オランダ植民地省水利・産業局がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

○３月20日（２・７）ライデンにて，『オランダ教育・芸術・科学局長（ファン・エウイック宛）の報告書』を執筆。

＊同日，フェルレル（Huerler）がコブレンツ（Koblenz）からシーボルト宛に書簡を送る。

＊３月23日（２・10）フロート（G. Vroht）がアムステルダムからシーボルト宛に書簡を送る。

＊４月１日（２・19）ハンス・フォン・Ed.がボンからシーボルト宛に書簡を送る。

＊４月４日（２・22）オランダ領東インド総督府のW. H.メドハーストがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊４月９日（２・27）ヘルレルマン（Hellermann）がストラスブルグ（Strassburg）からシーボルト宛に書簡を送る。

＊４月12日（２・30）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

○４月19日（３・７）オランダ政府大臣およびオランダのライオン騎士団団長がアムステルダムからシーボルトに叙勲通知書を送る。

○４月日付不詳，オランダ国王ウィルレム一世（Willem I）からライオン文官功労勲爵士，ハッセルト（Hasselt）十字章（金属十字章）を下賜さる。

＊４月20日（３・８）オランダ内務省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊４月21日（３・９）前オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがボーレンホウベン（Bollenhoven）からシーボルト宛に書簡を送る。また，マウツ（Mautz）ほかがシーボルト宛に両替書（金額101.70グルデン）を送る。

＊４月25日（３・13）オランダ教育・芸術・科学局長ファン・エウイックがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

○４月30日（３・18）オランダ領東インド陸軍の管理部将校（軍医少佐）に昇進，植民省の日本問題担当顧問に任命される。オランダ内務省がハーグからシーボル

ト宛に書簡を送る。この日，国王ウィレム一世はシーボルトの民族学的コレクションの購入を約束し，前金として12,000フローリン（fl.）が支払われる。

＊同日　母アポロニアと叔父ヨアヒム・ロッツがキッチンゲンからシーボルト宛に書簡を送る。

＊５月１日（３・19）オランダ領東インド政庁のG. J.ティシュがバタヴィアからシーボルト宛に書簡送る。

＊５月13日（４・２）オランダ植民地省水利・産業局がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊５月14日（４・３）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊５月18日（４・７）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊５月21日（５・24）前出島オランダ商館員C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。オランダ内務省がシーボルト宛に書簡を送る。

○５月23日（４・23）ライデンにて，母アポロニア宛の手紙を書く。

＊６月６日（４・26）オランダ内務省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊６月８日（４・28）オランダ教育・芸術・科学局長ファン・エウイックがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

○６月11日（５・２）フォールショウテン（Voorschooten）にて，『オランダ教育・芸術・科学局長（ファン・エウイック）宛の報告書』を執筆。

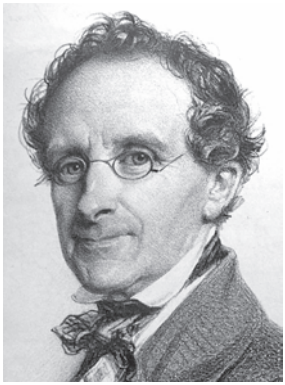
＊６月15日（５・６）プレイスラー（F. Preusler）がアムステルダムからシーボルト宛に書簡と領収書を送る。

△６月30日（５・21）吉雄権之助没する（享年46歳）。

＊同日　伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊７月１日（５・22）前出島オランダ商館員C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴほかがバタヴィアからシーボルト宛に請求書および精算書を送る。

＊７月２日（５・23）ライデンの王立植物標本館館長C. L.ブルーメがライデンからシーボルト宛書簡送る。



〔図25〕C. L.ブルーメの肖像画（ライデン国立植物標本館所蔵）

＊ ７月３日（５・24）前出島オランダ商館員C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ７月20日（６・12）オランダ領東インド総督府のG. J.ティシュがヴェルテフレーデン（現ジャカルタ）からシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ７月25日（６・17）フラモント（C. Flamont）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ７月26日（６・18）叔父ヨアヒム・ロッツがキッチンゲンからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ７月30日（６・22）前オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがボーレンホウベンからシーボルト宛に書簡を送る。
○ ７月31日（６・23）ライデンにて，母アポロニア宛の手紙を書く。
＊ 同日，ライデンの王立植物標本館館長C. L.ブルーメがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ８月７日（６・30）J.ションク（J. Schonck）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ９月７日（８・２）オランダ内務省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ９月10日（８・５）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ９月11日（８・６）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ９月21日（８・16）オランダ内務省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ ９月24日（９・１）ペーター・ファン・オウテレン（Peter van Outeren）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
○ ９月27日（８・22）オランダ教育・芸術・科学局長（ファン・エウィック）宛の手紙を書く。
○ 10月４日（８・29）ボンにて，伯父ロッツ宛の手紙を書く。
＊ 同日　オランダ植民地省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 10月５日（８・30）オランダ教育・芸術・科学局長ファン・エウイックがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
○ 10月13日（９・８）フォールショーテンにて，伯父ロッツ宛に手紙を書く。
○ 10月14日（９・９）フォールショーテンにて，「精算書リスト」を作成する。
○ 10月21日（９・16）ライデン所在，オランダ文学協会会員。

＊同日　クルイト？（Kluit）がライデンからシーボルト宛に短信を送る。
＊10月24日（９・19）J. W.ホルトロップ（J. W. Holtrop）がシーボルト宛に書簡を送る。
＊10月25日（９・20）J.ションクがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊10月26日（10・28）門人石井宗謙がシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』43-44頁　参照）。
○11月11日（10・８）フォールショーテンにて，「証明書付き精算書」を作成する。
○11月20日（10・28）ミュンヘンにて，母アポロニア宛の手紙を書く。
＊11月21日（10・18）叔父ヨアヒム・ロッツがキッチンゲンからシーボルト宛に書簡を送る。ヘルレマン（Hellermann）がバタヴィアのニューウェ・ディープ（Nieuwe Diep）からシーボルト宛に書簡を送る。
＊11月28日（10・25）伯父ロッツがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊11月30日（10・27）前出島オランダ商館員 C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴがバタヴィアからシーボルト宛に請求書を送る。図版製作者フラーンデレン（J. W. Vlaanderen）がライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
＊12月１日（10・28）出島オランダ商館員 H.ビュルゲルが出島からシーボルト宛に書簡を送る。
◇同日，H.ビュルゲルにより，この年バタヴィアへ発送した「48種類の日本産甲殻類のリスト」を作成。
＊12月５日（11・２）パリの庭師バーグマン（C. H. Bergmann）がユトレヒトからシーボルト宛に書簡を送る。
＊12月７日（11・４）元出島オランダ商館長ヤン・コック・ブロムホフがベルクハイム？（Berkheim）からシーボルト宛に書簡を送る。
＊12月21日（11・18）豊吉がシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』52-53頁）。同日，オランダ植民地省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
○12月24日（11・21）『オランダ教育・芸術・科学局長宛の報告書』をライデンで執筆。
＊12月26日（11・23）エイマーク（L. Eymaak）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊12月28日（11・25）図版製作者 J. W.フラーンデレンがライデンからシーボルト宛

に書簡を送る。

＊ 12月31日（11・28）シュナール（J. Schnaar）がユトレヒトからシーボルト宛に書簡を送る。

◇ 同日　出島オランダ商館員 H.ビュルゲルにより，この年バタヴィアへ発送した「日本産魚類の品名リスト」と「日本産動物リスト」を作成する。

＊ 月日不詳，ミュレル（Johannes Müller）書店がアムステルダムからシーボルト宛に請求書を送る。

△ 年月日不詳，前出島オランダ商館長 G. F.メイランがバタヴィアで没する（享年46歳）。

○ 『アイヌ族の風俗と習慣』（仏文）「新アジア雑誌」（パリ）巻７に掲載（「日本人の起源に関する覚書」より抜粋）。

◇ ベルギー独立。

1832年（天保３）　36歳

○ 月日付不詳，ライデンのラーペンブルフ（Rapenburg）19番地の家を借用。「日本博物館」を開設し，コレクションの一般公開をする。

〔図26〕シーボルト・ハウス（シーボルト旧邸宅）

〔図27〕シーボルト・コレクションの内，「果物籠」（シーボルト『NIPPON』図版）

＊ 1月1日（11・29）ロッテルダムの船主・貿易商A.ホボーケン親子商会がロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 1月2日（11・30）ロッテルダムの船主・貿易商A.ホボーケンがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 1月3日（12・1）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。ライデン大学教授J. R.トールベッケ（のちオランダ内務大臣）がライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 1月6日（12・4）ロッテルダムの船主・貿易商A.ホボーケンがロッテルダムからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 1月19日（12・17）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 2月28日（1・27）ライデン大学教授J. R.トールベッケがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 3月1日（1・29）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 3月24日（2・22）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 4月19日（3・19）前出島オランダ商館員C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 4月21日（3・21）ライデン大学教授J. R.トールベッケがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 4月22日（3・22）前オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがボーレンホウベンからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 4月24日（3・24）ライデン大学教授J. R.トールベッケがライデンからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 4月26日（3・26）デ・ヨンゲ（J. E. de Jonge）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 5月1日（4・17）前出島オランダ商館員C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴがバタヴィアからシーボルト宛に注文書および請求書を送る。
＊ 5月4日（4・4）オランダ領東インド陸軍将軍ファン・デン・ボッシュ（J. J. van den Bosch）伯爵がバイテンゾルフから東インド総督宛に書簡を送る。母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。
＊ 5月11日（4・11）スタレッツ（A. K. Staletz）がロンドンからシーボルト宛に書

簡を送る。

＊ ５月14日（４・14）前出島オランダ商館員 C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ５月23日（４・23）オランダ植民地省所属ミルフォード（Milford）がハーグからシーボルト宛書簡を送る。

○ ５月日付不詳，アムステルダムの J.ミュレル書店とシーボルト間で，『NIPPON』出版に関する契約書の草稿（下書き）を書く。

＊ ６月４日（５・６）オランダ領東インド政庁のヘレルマン（Hellermann）がバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ６月７日（５・９）オランダ領東インド総督府の G. J.ティシュがバタヴィアからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ６月29日（６・２）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ６月日付不詳，前出島オランダ商館員 C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴがバタヴィアからシーボルト宛に注文書を送る。

＊ ７月１日（６・５）前出島オランダ商館員 P. W.フェルケルク・ピストリウス，C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴがバタヴィアからシーボルト宛に書簡ならびに精算書を送る。

＊ ７月５日（６・８）前出島オランダ商館員 P. W.フェルケルク・ピストリウスおよび C. H.ドゥ・ヴィルヌーヴがバタヴィアからシーボルト宛に精算書を送る。

＊ ７月８日（６・11）前オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがボーレンホウベンからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ７月15日（６・18）前オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがボーレンホウベンからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ７月18日（６・21）ヘンドリックス（Hendriks）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ７月24日（６・27）オランダ国王ウィルレム一世がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ ７月28日（７・２）前オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがボーレンホウベン（Bollenhoven）からシーボルト宛に書簡を送る。元出島オランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフ（Hendrik Doeff）がハイデサーク（Hydesark）からシー

ボルト宛に書簡を送る。

＊ 7月日付不詳，ヴュルツブルグ大学解剖学教授ゴットフリード・フォン・シーボルト（Prof. Gottfried von Siebold）がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 8月3日（7・8）オランダ内務省課長職ファン・ラッパルド（A. G. A. van Rappard）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 8月4日（7・9）前オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがボーレンホウベンからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 8月5日（7・10）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 8月21日（7・26）前オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがボーレンホウベンからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 8月14日（7・19）グラーフ・ワルドブルグ・ブルヒフェルス（Graf Waldburg Bruchfels）がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 8月25日（7・30）グラーフ・ワルドブルグ・ブルヒフェルスがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 9月6日（8・12）母アポロニアがヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 9月7日（8・13）ジュサンズ？（Jusands）がアーン・ボード・プリンセス・マリアンネ（Aan Bord Prinses Marianne）からシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 9月8日（8・14）前オランダ領東インド総督ファン・デル・カペレンがボーレンホウベンからシーボルト宛に書簡を送る

＊ 9月9日（8・15）オランダ内務省がハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 9月15日（8・21）オランダ内務省課長職 A. G. A.ファン・ラッパルドがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 9月27日（9・4）オランダ内務省課長職 A. G. A.ファン・ラッパルドがハーグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 10月17日（9・24）オランダ植民地省所属ミルフォードがシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 11月5日（10・13）エドアルド・グラーフ・フォン・イルシュ（Eduard Graf von Yrsch）がテグレンセー（Tegrensee）からシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 11月5日（10・13）ノイマン教授（Prof. Neumann）がミュンヘンからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 11月22日（11・１）其扇とお稲がシーボルト宛に書簡を送る（注：『シーボルト関係書翰集』67-68頁）。

○ 11月30日（11・９）バイエルン国王ルートヴィッヒ一世（Ludwig I）を訪問。バイエルン文官功労勲章騎士十字章を下賜さる。

○ 12月１日（11・10）バイエルン国王叙勲記。

＊ 12月11日（11・20）ヴュルツブルグ王立学術局がヴュルツブルグからシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 12月14日（11・23）ブラウン・K.?（J.Buraun K）がヴュルツブルグからシーボルト宛にヘルマン・フリードリッヒ（Hermann Friedrich）に関する推薦願いの書簡を送る。

＊ 12月28日（閏11・７）ランベルト（Lambert）がロンドンからシーボルト宛に書簡を送る。ショッター？（F. W. Schotter）がショーンブルン（Schonbrunn）からシーボルト宛に書簡を送る。

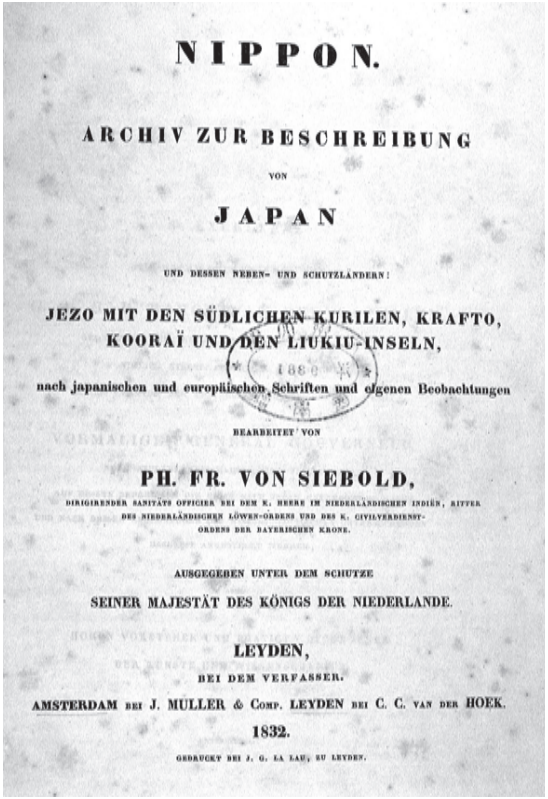
＊ 12月31日（閏11・10）フォン・セーリス（G.U. von Salis）がハーレム（Harlem）からシーボルト宛に書簡を送る。

＊ 同日　出島オランダ商館員 H. ビュルゲルが，この年バタヴィアへ発送した日本産哺乳動物類の品名リスト（46種の和名と学名を列挙し，標本数：骨格，皮膚，その他）および日本産鳥類発送についてのリストを作成する。

○ 月日不詳，『NIPPON』初版，第１分冊の扉（内表紙）に1832年出版と印刷，アムステルダムの J.ミュレル書店（J. Muller & Co.），ライデンの C. C.ファン・デル・フーク書店（C. C. van der Hoek）の担当。

○ 月日不詳，『日本人の起源に関する論文』（蘭文）「バタヴィア科学芸術協会雑誌」第13巻に掲載。

○ パリ所在，アジア協会会員となる。



NIPPON.

ARCHIV ZUR BESCHREIBUNG

VON

JAPAN

UND DESSEN NEBEN- UND SCHUTZLÄNDERN:

JEZO MIT DEN SÜDLICHEN KURILEN, KRAFTO,
KOORAÏ UND DEN LIUKIU-INSELN,

nach japanischen und europäischen Schriften und eigenen Beobachtungen

BEARBEITET VON

PH. FR. VON SIEBOLD,

DIRIGIRENDER SANITÄTS OFFICIER BEI DEM K. HEERE IM NIEDERLÄNDISCHEN INDIÊN, RITTER DES NIEDERLÄNDISCHEN LÖWEN-ORDENS UND DES K. CIVILVERDIENST-ORDENS DER BAYERISCHEN KRONE.

AUSGEGEBEN UNTER DEM SCHUTZE

SEINER MAJESTÄT DES KÖNIGS DER NIEDERLANDE.

LEYDEN,

BEI DEM VERFASSER.

AMSTERDAM BEI J. MULLER & COMP. LEYDEN BEI C. C. VAN DER HOEK.

1832.

GEDRUCKT BEI J. G. LA LAU, ZU LEYDEN.

〔図28〕『NIPPON』初版（1832年），本文編の内表紙と図版編の口絵
（九州大学付属図書館医学分館所蔵）